

2023年度

JICA沖縄教師海外研修 報告書・ ワークショップ集

(研修国：🇵🇵パラオ共和国)



主催：JICA沖縄 後援：沖縄県教育委員会
実施：公益社団法人青年海外協力協会

目次

研修概要	1
派遣国概要	3
参加者一覧	4
研修内容	
事前研修	5
パラオ研修	10
事後研修	18
研修を終えて	21
ワークショップ集	24
新聞連載記事	
沖縄タイムス社「パラオとの懸け橋に」	
.....	68
特別連続企画	
琉球放送 News Link「パラオ通信」	74

2023年度JICA沖縄教師海外研修概要

教師海外研修とは

JICAの各国内拠点ごとに所管する都道府県の教育委員会と協力し実施している、講義・ワークショップ・フィールドワークを中心とした研修プログラムです。開発途上国を訪問し、国際協力事業やJICA海外協力隊の活動現場の視察、現地の児童・生徒との交流などを体験し、帰国後視察で得た知識や経験をもとに、国際理解・開発教育ワークショップを作成し、学校現場で実践します。

1. 研修のゴール

地域（日本・沖縄）の特性を活かして、
地元企業や自治体等が実践する**国際協力について理解を深める。**

研修で得た知識や経験をもとに、
SDGsをテーマとした**参加型学習教材（ワークショップ）を作成し、実践する。**
▶汎用性の高い授業案・教材を作成し、報告書に掲載します。

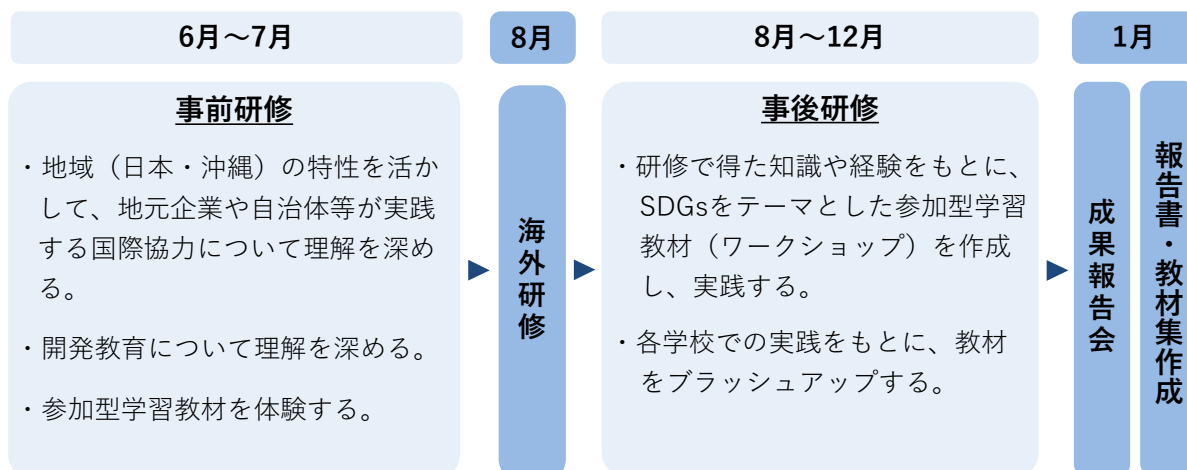
2. 海外研修国：パラオ共和国

JICAプロジェクト視察、現地教育施設の訪問および交流、JICA海外協力隊員の活動視察等
《参考情報》

- ・外務省パラオ共和国事情 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/palau/index.html>
- ・JICAパラオ事務所サイト <https://www.jica.go.jp/palau/office/index.html>

3. 研修の内容と日程

本研修は、①事前研修、②海外研修（パラオ）、③事後研修（教材作成）、④成果報告会の4つからなります。



	日 時	内 容	
事前研修	6月24日(土) 10:00-15:30	第1回 事前研修	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・チームビルディング ・パラオにおけるJICA事業 ・授業実践を行う学校の隊員と顔合わせ
	7月15日(土) 10:00-16:00	第2回 事前研修	<ul style="list-style-type: none"> ・国際理解・開発教育について ・開発教育ワークショップ体験 ※国際理解・開発教育指導者養成講座と合同開催
	7月22日(土) 10:00-16:00	第3回 事前研修	<ul style="list-style-type: none"> ・開発教育ワークショップ体験 (過年度教師海外/国内研修参加者作成教材) ・教材作成(10分ワークショップ)について ※国際理解・開発教育指導者養成講座と合同開催
	7月23日(日) 10:00-15:00		<ul style="list-style-type: none"> ・国際協力事例講義 パラオ北部沿岸漁業組合における回遊魚(カツオ・マグロ類)の漁獲技術向上と水産物の加工販売を通じた組織強化事業 ・都屋漁港関係者インタビュー
海外研修	8月7日(土) 8月18日(金)	海外研修 パラオ	<ul style="list-style-type: none"> ・JICAプロジェクト(北部沿岸漁業組合など) ・NGO(ピースウィンズ・ジャパンなど) ・JICA海外協力隊活動視察(学校訪問など) ・その他(ペリリュー島、県系人交流など)
事後研修	8月19日(土) 10:00-15:30	第1回 事後研修	<ul style="list-style-type: none"> ・海外研修の振り返り ・ワークショップ作成
	9月～11月	各自、学校での授業などでワークショップ実践	
	11月25日(土)	おきなわ国際協力・交流フェスティバルへのブース出展 <ul style="list-style-type: none"> ・海外研修結果や実践進捗の発表 ・ワークショップの実践 	
	12月16日(土) 10:00-15:30	第2回 事後研修	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップのブラッシュアップ ・実施報告書の作成
報告会	1月20日(土) 10:00-16:00	第3回 事後研修	実施報告会 <ul style="list-style-type: none"> ・海外研修実施報告 ・ワークショップ実践

パラオ共和国 (Republic of Palau)



写真提供：鈴木革/JICA

- 【首都】 マルキョク（2006年10月、コロールより遷都）
- 【人口】 18,024人（2021年、世界銀行） ※在留邦人 261名（2022年10月現在）
- 【面積】 488平方キロメートル（屋久島とほぼ同じ）
- 【国旗】 デザインは海を表すブルーを背景に中央からやや左寄りに満月を表す黄金色の円。平和と静寂、海と陸の豊饒を表している。



- 【気候】 海洋性熱帯気候で、高温多湿。
雨期・・・5月～10月 乾期・・・11月～4月(乾期でもスコール性の雨が多い)
平均年間降雨量・・・3,856mm(2020年の平均)
平均気温・・・27度 平均湿度・・・83%
(2021年：Time and Date)

- 【言語】 パラオ語、英語
- 【民族】 ミクロネシア系
- 【宗教】 キリスト教
- 【通貨】 米ドル



- 【主要産業】 観光業
- 【教育制度】 パラオの義務教育は、小学校（1年生から8年生）と高校（1年生から4年生）で、卒業後多くの学生が国内唯一のパラオ短期大学に進学します。小学校は全国に16校あり、高校は6校あります。

出典： 外務省 パラオ共和国

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/palau/data.html>

https://www.palau.emb-japan.go.jp/itpr_ja/about_Palau.html

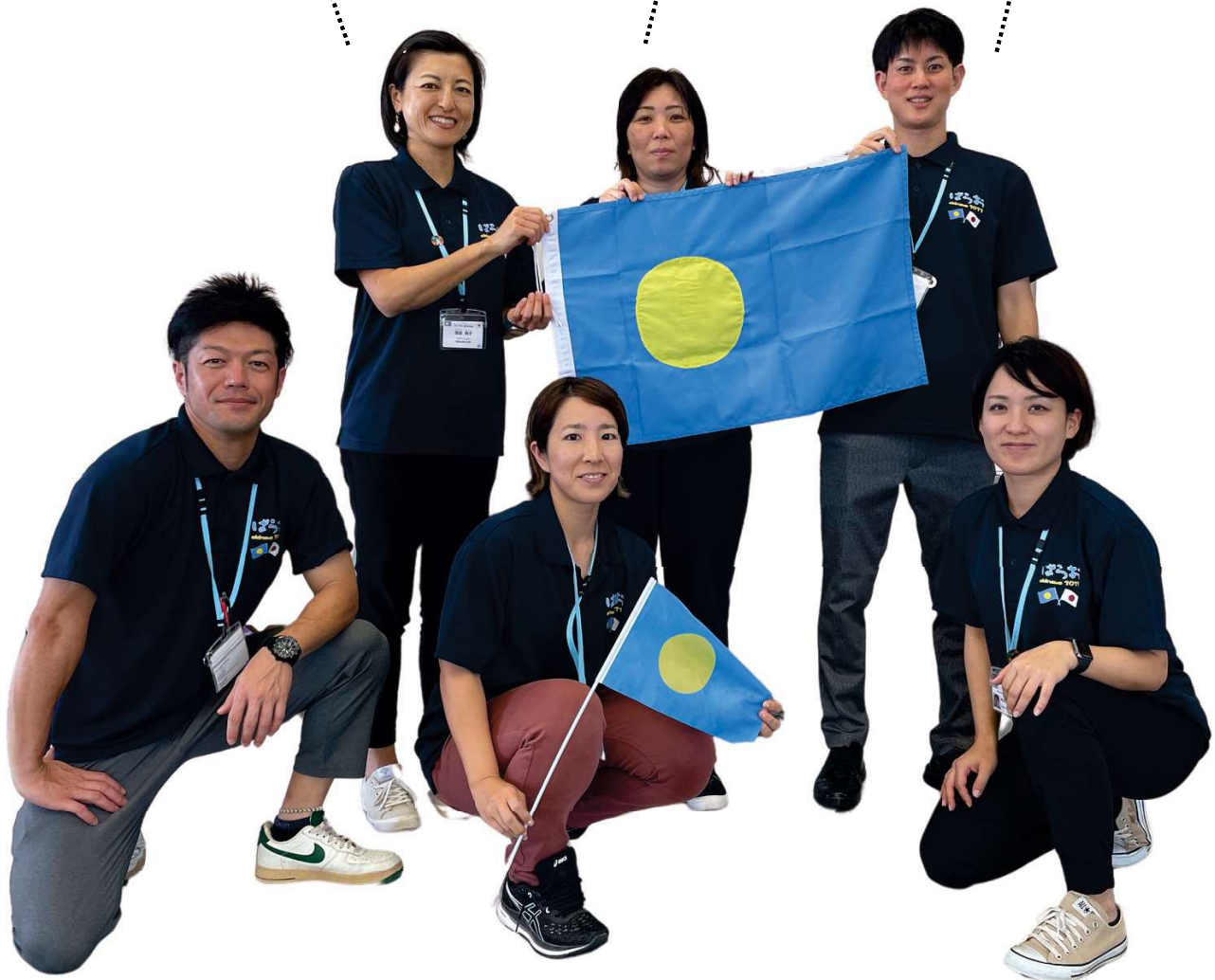
https://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/palau_1.html

参加教員

池宮 牧子
名護市立東江小学校
英語専科

大城 真紀子
豊見城市立豊見城中学校
国語科

浦崎 政成
竹富町立黒島小中学校
英語科



伊集 環
豊見城市立豊見城小学校

棚原 美緒
うるま市立宮森小学校

村吉 多賀子
沖縄県立八重山高等学校
地歴公民科

事前研修

第1回 6月24日（土）10:00-15:30 @JICA沖縄センター

講師/ゲスト	JICAパラオ事務所 井上栄氏 JICA海外協力隊員 出居正氏/筒井駿樹氏/小川ゆい氏/酒寄真成氏/石田沙織氏
目的	①研修の概要、ゴールを理解する。 ②派遣国および海外研修について知り、事前準備の目途をつける。 ③参加する教員同士のコミュニケーションが円滑に図れるようにする。

○オリエンテーション

- ・ JICA沖縄 市民参加協力課 木田課長の挨拶
- ・ 自己紹介
- ・ 教師海外研修の概要説明
- ・ パラオについて
- ・ RBC上江洲記者との顔合せ



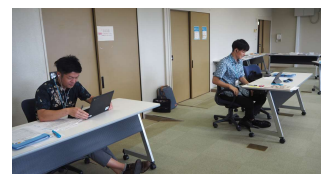
○アイスブレイク・チームビルディング

- ・ 自己紹介
- ・ ネームトス
- ・ 部屋の四隅
- ・ ブラインドブリッジ



○授業実践を行うパラオの学校の隊員との顔合わせ

- ・ パラオ研修時の協力隊ジョブシャドウイングについての説明
- ・ 各小学校の隊員との顔合わせと授業実践に向けた調整（ZOOM）



○研修の目標

- ・ チーム目標の決定
「広める・繋げる！みんなが楽しく取り組める教材づくり」



第2回 7月15日（土）10:00～16:00 @JICA沖縄センター

講師/ゲスト	NPO法人沖縄NGOセンター 奥山有希氏 糸満市立三和中学校大度分校 新垣孝子教諭 JOCA 矢田部建佑氏、稲住光祐氏
目的	①開発教育についての基礎理解。指導者自身がおもしろさを知る。 ②多様なワークショップの手法を知るとともに、それぞれの効果や受けての気持ちを体験する。 ③自分ならどうアレンジして教材を使用するかという視点を獲得。 ④県内の実践者の取組から、学級経営や時間割調整の知恵を学ぶ。

Program 1	内容	担当
	【講義&ワークショップ】 ・参加型学習の意義 ・開発教育のはじまり、歴史	奥山有希氏

NPO法人沖縄NGOセンターの奥山有希さんから、開発教育について講話をしていただきました。その中で、開発教育の特徴として、参加型の手法（学習方法の重視）があり、実際に部屋の四隅のアクティビティーを行いました。実際に体験して思ったことは、選択するために部屋の隅に移動する活動（動く活動）が参加型なのではなく、なぜそれを選択したのかをそれぞれ聞くことで、参加者の視野が広がったり、考えが深まり、自然と自分事として考えられることが重要だということです。今後、教材を作成するにあたり、大切な視点だと思いました。（大城真紀子）

Program 2	内容	担当
	【ワークショップ体験①】 新・貿易ゲーム～経済のグローバル化を考える～	矢田部建佑氏 稲住光祐氏

参加型のワークショップを体験しました。JOCAの方々にファシリテートしていただき、貿易ゲームを行いました。大人でも楽しみながらワークショップに参加できることと、体験する中で様々なことを考えさせられるので、午前中の開発教育についての講義でお話していた「方法はメッセージを持つ」を実感することができました。（大城真紀子）



Program 3	内容	担当
	【ワークショップ体験②】 開発教育ワークショップ集「気候変動」「プラスチックごみ」を活用した授業実践	新垣孝子氏

糸満市立三和中学校大度分校の新垣孝子先生が前任の糸満中学校で行っていた実践を実際に授業してもらいました。連立方程式とSDGsがどのように結びつくのか初めはイメージできませんでしたが、開発教育教材を導入に用いながらしっかりと教科で身につけたい力に向かって授業が展開されていました。よくSDGsをどのように教科と結び付けたいかわからないということを耳にしますが、孝子先生の実践を受けて、SDGsを教えるのではなく、自分の教科で身につけたい力を目指しつつ、SDGsを一つの視点として結びつけるという考えることが大切だという気づきがありました。（大城真紀子）



第3回 1日目 7月22日（土）10:00-16:00 @JICA沖縄センター

講師/ゲスト	沖縄県立豊見城高等学校 伊波郁氏（2007年度教師海外研修・ポリビア） 那覇市立石嶺小学校 安田浩哉氏（2022年度教師国内研修・鹿児島） つながる学び研究会 土橋泰子氏
目的	①授業に取り入れやすいフォトランゲージを知り実践する。 ②多様なワークショップの手法を知るとともに、それぞれの効果や受けての気持ちを体験する。 ③自分ならどうアレンジして教材を使用するかという視点を獲得。 ④10分ワークショップを体験し、3回目以降のワークショップづくりにつなげる。

Program 1	内容	担当
	【ワークショップ体験①】 セネガルのファールさんの暮らし	伊波郁氏

沖縄県立豊見城高校の先生によるワークショップ「セネガルのファールさんの暮らし」を体験しました。フォトランゲージを中心にファールさんへの支援や近藤さんの話、セネガルや日本のいいところを考えました。日本人とセネガルの人の価値観の違いから自分の既存の価値観について懐疑的な気持ちになるようなワークショップでした。正しさの基準は人それぞれかもしれませんが、大切にしている考えを否定するのではなく、理解する姿勢が大切だということに気づくことができるワークでした。（大城真紀子）



Program 2	内容	担当
	【ワークショップ体験②】 地域課題れんさマップ	安田浩哉氏

昨年教師国内研修に参加された那覇市立石嶺小学校教諭、安田浩哉さんの実践報告とSDGsれんさマップのワークショップを行いました。実践報告では、身近な課題から地域のゴミ拾い、拾ったゴミを使ったアートなど、子ども達の気持ちを大事にしながらか実践されている様子が伺え、自分事として考えさせる工夫が必要だと改めて感じました。SDGs連鎖マップでは、一つの課題がSDGsの様々なゴールと紐づいているということを視覚的に理解することができるので、一つの行動が様々なことに関連しているということが子ども視点でもわかりやすいと思いました。（大城真紀子）



Program 3	内容	担当
	【ワークショップ体験③】 10分ワークショップについて	土橋泰子氏

土橋泰子さんによる10分ワークの実践と分断された写真のペアを探すというワークショップを行いました。ペアの写真を見つけるための情報は、手持ちの写真をじっくり見てない部分をイメージする必要がある、自然とフォトランゲージができるようなしなかけがありました。組み合わせた写真から、それぞれの国について話ができるので、パラオでも自分が気になるものは写真に残しておこうと思いました。また、10分ワークでも、写真を使ったワークだったので、パラオでの研修では自分の感性を大事にしながら、多くのことを学び、しっかりと記録に残したいと思います。(大城真紀子)

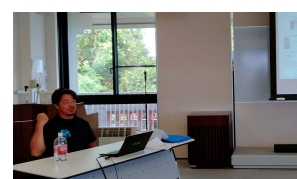


第3回 2日目 7月23日(日) 10:00-15:00 @JICA沖縄センター/読谷村漁業協同組合

講師/ゲスト	有限会社琉球環境マネジメントサービス 吉田透氏 読谷村ゆたさむら推進部 山内嘉親氏 読谷村漁業協同組合 山内卓氏
目的	①作成する教材のイメージをつかむ。 ②沖縄の強みを活かした国際協力事例について知る。 ③授業づくりのヒントを得る。

Program 3	内容	担当
	【国際協力事例講義】 ・沖縄の水産業と島嶼国 JICA課題別研修・島嶼国における水産業の多様化と資源管理 ・JICA草の根事業 パラオ北部沿岸漁業組合における回遊魚(カツオ・マグロ類)の漁業技術向上と水産物販売を通じた組織強化	吉田透氏

有限会社琉球環境マネジメントサービスの吉田透さんから、パラオの水産業についての課題や事業のねらい、現在のフェーズなどのお話から、パラオで実施している草の根事業について詳しく説明を聞くことができました。沖縄の漁業の歴史から持続可能な漁をするための工夫や組織づくりといったことを聞きながら、安定した漁獲量を確保しつつ、乱獲を避けるという一見相反するようなことでも、漁の方法を工夫し、海の環境にも配慮したパラオ漁の方法は理にかなっていると感じました。また、それをパラオではどのように取り入れて実践しているのか見てみたいと思いました。(大城真紀子)



Program 3 内容	担当
【読谷村漁業協同組合インタビュー】 ・読谷村漁業協同組合のあゆみ、再建計画 ・JICA研修受け入れ内容	山内嘉親氏 山内卓氏

読谷村役場ゆたさむら推進部の山内部長と漁協の山内さんから、都屋漁港のあゆみ、商品開発や観光業との連携など10年の再建計画について詳しくお話を聞くことができました。漁協に対するイメージアップのため、「開かれた漁協づくり」をテーマとした意識改革や、経営面で赤字からどのような過程を経て再建に至ったのかを聞き、どのような分野でも、課題を丁寧に分析し、見通しを持って実践することの大切さやその土地の人を大切にすることが重要だと実感しました。パラオの漁業との比較や、沖縄の草の根事業がどのように浸透しているのかを現地で見たいと思いました。（大城真紀子）



海外研修スケジュール

※8/7~8と8/18は移動日

	日付	訪問先／内容	研修のねらい・ポイント
1	8/9 (水)	北部沿岸漁業組合 JICA沖縄 草の根事業	JICA沖縄草の根事業の活動現場を視察し、沖縄の技術を活かした支援を知る。
		JICAパラオ事務所 ブリーフィング	パラオの課題やJICAパラオ事務所の取り組みおよび日本の国としての支援やNGOの支援について知る。
2	8/10 (木)	ローカルマーケット	週に一回開かれるマーケットを視察し、現地の方の生活や食文化などについて知る。
		パラオ国際サンゴ礁センター (PICRC)	パラオにおけるサンゴおよび海洋環境保全の取り組みを知る。
		在パラオ日本大使館	これまでの研修の報告と、日本大使館の役割を理解する。
		県系人交流 金城史子さんインタビュー	沖縄にルーツをもち、終戦後パラオに戻られた方から委任統治時代や終戦後の様子などのお話を聞く。
3	8/11 (金)	シニアシチズンセンター	現地のシニアの方と交流し、パラオの文化や変化について知る。また、日本委任統治時代の話を聞く。
		パラオ高校	パラオにおける中等教育の現状を知る。 日本語を学ぶ高校生と交流する。
4	8/12 (土)	ペリリュー島	第二次世界大戦の戦跡を視察し、沖縄での地上戦との相違を知る。
5	8/13 (日)	ホームビジット	パラオの方と一日をともにし、現地の方の生活や習慣、価値観を知る。
6	8/14 (月)	JICA海外協力隊 ジョブシャドウイング	パラオの学校でJICA海外協力隊の活動を視察し、パラオにおける学校教育や支援の現状を知る。子どもたちに授業を実施し、協力隊の模擬体験をする。
7	8/15 (火)	パラオ国立博物館	パラオの先史時代から他国による統治時代、そして現在に至る歴史を資料を通して知る。
		コロールリサイクルセンター	JICA関西草の根事業の活動現場を視察し、島しょ地域におけるリサイクルの方法や、未活用資源を利用した商品開発を知る。
		JICA関西 草の根事業	
8	8/16 (水)	ピースウィンズ・ジャパン	国際NGOピースウィンズ・ジャパンのパラオにおける活動を聞き、島しょ地域ならではの医療の課題について知る。
		パラオコミュニティ カレッジ	短期大学で農業支援をするJICA海外協力隊員の活動を視察し、島しょ地域ならではの農業の課題や取り組みを知る。
9	8/17 (木)	JICAパラオ事務所 小林所長との懇談会	これまでの研修の報告と、パラオの課題について意見交換を行う。
		バベルダオブ島廃棄物 処分場 JICA中部 草の根事業	JICA中部草の根事業の活動現場を視察し、島しょ地域が抱える廃棄物処理の課題や日本の技術を活かした支援について知る。

フィールドワーク1日目 8月9日(水)

○北部沿岸漁業組合(担当:池宮牧子)

北部沿岸漁業組合を訪問し、回遊魚の漁獲技術向上と水産物の加工販売促進を行う草の根事業の現場を視察しました。組合長のブリジットさんと漁師のハードリーさんから話をうかがいました。

北部沿岸漁業組合のゴールは、①マーケティングプランを作ること ②パートナーと連携していくこと ③加工品からの収入アップを図ることの3点だそうです。それを達成するために、ワーキンググループを作って組織化したり、マーケットを分析して漁師や消費者のニーズを把握し、商品に付加価値をつけブランド化したりしているということです。課題は資金不足と人手不足であり、利益を上げて改善し、北部沿岸漁業組合の魅力伝えていきたいと話していました。

話を聞き、疑問に思ったことを質問しました。

Q女性の組合員はいるのか

→女性のメンバーは9名いて、シャコ貝の仕事に携わっている。
漁師はいない。

Q北部沿岸漁業組合の強みは何か

→北部沿岸漁業組合では、人がいつも助け合って生産したり、イベントを開催したりしている。漁師とその家族、住民、政府が一体となった組織であることが強みである。

Q沖縄での研修で学んだことは何か

→漁師さんに利益を還元し、組合に入って良かったと思ってもらえることが大切であること。また、漁業の技術として、「石巻落とし」の漁法が外洋でも有効であることを学んだ。

自分たちの力で北部沿岸漁業組合の組織強化を図り、漁業や北部の活性化を目指している姿が印象的でした。「私がいなくても今の活動が継続し、発展していくことが私の夢よ。」と力強く話すブリジットさん、そして、「コロナがきっかけで専業漁師になることができたから、この船を『コロナ丸』と名付けたんだ。」と笑うハードリーさんに、北部沿岸漁業組合の明るい未来を感じました。



○JICAパラオ事務所(担当:大城真紀子)

JICAパラオ事務所のブリーフィングでは、井上職員から話を伺いました。話を聞いて、JICAとODAについて、自分自身の理解が曖昧だったことに気づきました。ODAには、二国間援助と多国間援助があ、JICAは二国間援助にあたるものだということがわかりました。今回は、パラオの課題に対して、JICAがどのような支援を行っているのかを詳しく説明していただきました。パラオにおける日本の協力概要として、海上保安分野の能力向上や海洋環境の保全といった「持続可能な海洋の実現」、経済成長の基盤強化、保健医療サービスの向上、教育機能強化といった「社会基盤・産業育成基盤の強化、民間投資の支援及び人材育成」、「気候変動・環境問題・防災への対応」の3つ重点分野がありました。今回の研修で私達もJICAの国際協力を実際に見て回る機会が多くも設けられているの



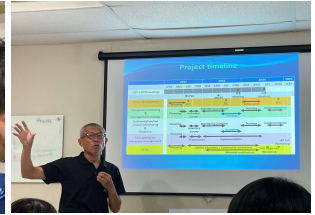


で、それぞれの支援がどのような課題と結びついているのか、またどのように改善しているのかをしっかりと見学しようと思います。特に、私達は教師という立場で今回参加しているのでパラオの教育現場における隊員の様子や支援、協力が実際どのようにして行われているのかをしっかりと見ておきたいと思っています。

フィールドワーク2日目 8月10日(木)

○パラオ国際サンゴ礁センター（担当：浦崎政成）

「パラオ国際サンゴ礁センター」(PICRC)では、研究員のルーシーさんと木村さんからマングローブやサンゴ礁などの生態系についての調査結果や今後のアクションプランについて講話をいただきました。特に印象に残っているのは、海洋保全について子ども達の関心を高めるために様々な活動をしているという点です。例えば、PICRCのスタッフたちが学校に訪れ、児童生徒達にサンゴの白化現象のデモンストレーションを見せたり、実際にマングローブやサンゴ礁を見る体験的な活動を行っていました。また、海洋保全をテーマとした絵画コンテスト（その後、入選絵画を使ってカレンダーを作成する）や2分間のフィルムコンテストを行うなど、ユニークな取り組みをしている点にも驚きました。こういう取り組みは、海洋保全や海の生態系に関する知識を高める素晴らしい取り組みだと感じました。私が現在勤める学校においても、海に囲まれている小さな離島地区ということもあり、海洋保全について学ぶ授業に力を入れています。ここで学んだことを持ち帰って、先生方や生徒達に伝えて行きたいと思っています。



○沖縄県系人 金城史子さんインタビュー（担当：大城真紀子）

大使館で話を伺った直後のインタビューだったため、史子さんの話がよく理解できました。父親がウチナーンチュ、母親がパラオの県系2世である史子さんから、戦前の清水村での暮らしや、戦禍を逃れるために隠れた山での暮らし、戦後パラオでどのように生き抜いてきたのかをインタビューすることができました。戦前は、毎朝3時に起きて5時間かけて学校へ通うという日々を過ごし、清水村の国民学校へ通うようになると、戦争が始まったそうで、思春期の大事な時期を時代に翻弄されながら力強く生き抜いた史子さんのお話には私たちは圧倒されました。子育てを一段落した後、大学へ入学したり、ホテルを経営したりと、アグレッシブに活躍してきた史子さんに、どんな時に父親のアイデンティティ（沖縄の血が流れている）を感じるかと質問すると、仕事をしないと落ち着かない性格がウチナーンチュを感じる時だとおっしゃっていました。また、パラオや沖縄の子どもたちへどのようなメッセージを送りたいですか？という質問では、自分の力で生きていくために、自立して欲しいということとを熱く語っていらっしゃいました。日本の子ども達に求められている「生きる力」にも通じる考え方



だと感じました。帰り際、今勉強中の編み物をいくつか見せて頂きました。誰の手も借りず、さくさくとスマートフォンを使いこなし、YouTubeを見ながら勉強していると笑顔で答える史子さんに、いつまでも健康で若くあるための秘訣は、学び続けることであるというメッセージを頂いたように思います。

フィールドワーク3日目 8月11日(金)

○シニアシブズンセンター（担当：伊集環）

シブズンセンターでは、パラオの高齢の方々が健康増進を図るため、座って行える体操に取り組んでいました。参加されている方々は週二回の集まりを楽しみにしているということで、訪問時も多くの笑顔が見られました。また、中には日本にルーツを持ち、日本語を話す方もいました。さらに、体操の前後には日本特有のカルタの仲間である花札を楽しんでおり、遊びからも日本統治時代の影響を感じ取ることができました。体操後には、私たちの準備した沖縄に関するクイズで楽しいひと時を過ごすことができ、現地の方と直接触れ合う貴重な時間となりました。医療体制に課題があるパラオでは、このような体操は、病気を予防するためにもとても有効な手段だと思いました。同時に、男性の参加者が1人だったので、どうしたら男性の参加者を増やすことができるのか、その対策の必要性も感じました。パラオの地理的環境や食料事情では改善することは難しいのかもしれませんが、運動を通して、健康的な生活に興味関心をもつ方が少しでも増えたらいいなと思いました。



○パラオ高校（担当：浦崎政成）

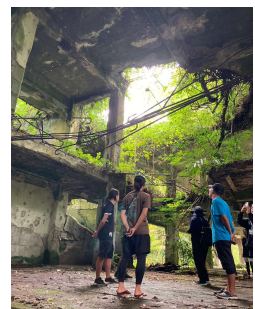
パラオ唯一の公立高校であるパラオ高校を訪問しました。前半は校長先生の講話を聞いたり、パラオ高校の生徒に学校の案内をしてもらいました。パラオ高校には、農業技術やツーリズムなど様々な分野を学べる学科があり、卒業後はコミュニティカレッジやアメリカなどの海外の大学に進学する人が多いということが分かりました。後半は、日本語を学んでいる20名程のクラスと交流を行いました。私達の沖縄に関するクイズに笑顔で取り組んでくれたり、カチャーシーと一緒に踊ったりと親睦を深めることができたので嬉しかったです。私が特に印象に残っているのは、将来の夢について話をする時の彼らの希望に満ち溢れた表情です。医者になりたい、歌手になりたい等、自分自身の夢を真剣に語っている時の彼らの目はとても輝いていました。国際協力を通じて、パラオの子供達が自分の夢や目標に向かって努力できる環境を作っていくことも大切ではないかと改めて感じました。



フィールドワーク4日目 8月12日(土)

○ペリリュー島（担当：大城真紀子）

個人的に、小中高と体系的な平和教育のモデルができたらいいなという目的があってこの教師海外研修に参加したので、ペリリュー島のフィールドワークは特に印象深いものでした。ガイドをなさっていた平野さんから、ペリリュー島での戦いは、日本対米国という対立以外にも、米国海軍と米国陸軍の日本本土侵攻計画での対立があったことを聞き、ペリリュー島に初めに上陸した海軍との折り合いが合わず、途中で陸軍と交代したこと、そして、ペリリュー島を後にした米国海軍が次に向かったのが、沖縄であることを聞き、この戦争がまさに世界大戦であることを感じさ





せるものでした。また、米国海軍を率いていたニミッツ提督が後に残した「この戦争は本当に必要だったのか疑問に思う」という言葉も印象的でした。それと同時に、平和教育を単純に「戦争は二度とあってはならない」という言葉だけでまとめることはできないと思いました。戦争の悲惨さを伝えることはもちろん大切なことですが、どちらが悪いという対立構造をイメージさせてしまう説明に終始するのではなく、もっと大きな世界を子ども達に考えさせたいと思いました。例えば、どうしたら戦争が起こらない社会がつかれるか？どうしたら永続的で平和な社会ができるのか？といった自分と社会との繋がりや、自分の行動がどのように社会に影響するのかということを考えさせることが、未来志向型の平和教育ではないかと考えました。形骸化する平和教育が新たな紛争

や戦争に繋がってしまう危機感と、私たち教師に求められている平和教育の重要性を感じさせるフィールドワークだったと思います。ここでの学びや今感じていることを同僚や子ども達に、還元できるようにしたいです。

フィールドワーク5日目 8月13日(日)

○ホームビジット (担当：棚原美緒)

ホームビジットでは、パラオで生活をするご家族と1日を過ごし、現地の生活や習慣などを体験する目的で、3か所の受け入れ先へ分かれての研修となりました。私は、パラオ最大のバベルダオブ島西部にあるガッパン州イボバン地区にあるダニカさんのご家族がいるお宅へのホームビジット。ガッパン州にあるイボバン地域は、小さな村でそこに住む人のほとんどが親の兄弟などの親戚だそうです。

村には全児童12人の小さな小学校があります。そこでは、生徒も教師も校長先生も親戚であるということを知り、驚きました。また、近所を散策していると窓のない公民館のような集会所や共用のコインランドリーなどがありました。さらに、イボバン地域には、昔から信仰されている地域宗教である「モデグゲイ教」の信者が住む地域だそうです。「モデグゲイ教」の特徴は、規律の厳しさ・禁酒と禁煙は絶対条件ですが、最近ではキリスト教も取り入れながら大切に信仰されているそうです。

ダニカさんのご自宅では、歓迎の飲み物にココナッツジュースを頂きました。パラオ人は、水分補給にココナッツジュースをよく飲むそうで研修中にもその光景をよく見かけました。さらに、全て飲み終えるとココナッツを半分に割り、中の実をくり抜いて食べるらしく食感はプルプルとしたこんにゃくのように、味は冬瓜に似たような味をしていました。また、お昼ご飯の時間になると、ココナッツの葉を編んで作ったお皿の中に天ぷらが並び、ダニカさんの父が海で釣った魚の煮付けやお刺身・天ぷら・マングローブガニ・タロイモとココナッツのポタージュスープなどが並び、パラオの豪勢な家庭料理に舌鼓を打ちました。他にも各学校での制服、靴で登校したり毎朝ラジオ体操を行ったりする習慣なども日本を参考にして取り入れられたものであることを知り、日本とパラオの繋がりを深く感じました。今回は、古くから伝わるモデグゲイ教を体験することはできませんでしたが、ダニカさん家族の生活様式や村の様子から、ひと昔前の沖縄の離島や小さな集落をイメージできるようなのどかな雰囲気印象的な地域でした。パラオでの食文化や沖縄と共通点の多い生活様式などを国際理解として授業で子供達へ還元したいと感じました。



○協力隊ジョブシャドウイング (担当：村吉多賀子)

ジョブシャドウイングでは、各参加者が別々の小学校へ配置され、ほぼ始業時から授業終了時間までそこに配属されている協力隊隊員の仕事の様子を見学し、午後から私たちが実際に授業を行うという流れでした。私が行くことになったマルキョク小学校は児童数が1～8年生（6歳～14歳）約100名、教職員数14名の中規模校でした。午前中は隊員の銅道さんの仕事を見学させていただきました。2年生の算数でしたが、銅道さんは授業の導入や教師の補助的活動を行っていました。児童の様子は日本とよく似ていて、集中する子、そうでない子など様々でした。最も気になったのは英語での読み書きが困難な児童が多いことでした。授業は具体物を使うなど工夫されていて分かり易かったのですが、英語が読めない・書けないことでワークシートを埋めることができない児童が多いように感じました。午後は音楽の時間を使い、3・4年生合同クラスに授業をさせていただきました。そこで石垣島や学校紹介、勤務校の校歌ダンスを踊るという活動中心の授業を行いました。校歌ダンスは勤務校の生徒が歌い踊った動画を見せてそれを元に小学生たちがダンスを見よう見まねで踊ってくれました。上手にノリ良く踊ってくれ、動画も撮らせてもらったので、帰国後に校歌ダンス動画に参加した生徒たちに見せました。間接的にはありましたがパラオと八重山で国際交流を行うことができ良い機会となりました。



○パラオ国立博物館 (担当：村吉多賀子)

パラオ国立博物館には、先史時代・スペイン統治時代・日本統治時代・戦後のアメリカ統治時代・独立後の歴史や民俗に関する展示物が多く展示されていました。私が特に興味をもったのは日本統治時代の展示物です。日本統治時代は1914年から45年までの31年間で、1922年にコロールに南洋庁が設置され、日本によって教育の普及や衛生状態の向上が図られました。博物館では当時の街の様子や使用されていた教科書、個人の通知表、卒業証書などがきれいに保管されており、当時の様子



うかがい知ることができました。更に、階段をおりる壁にひっそりと太平洋戦争時の現地の人々の証言が展示されていました。この証言を読むと戦時中に日本兵から現地人が受けた暴力の様子や、それに戸惑う現地の人々の様子が書かれていました。この博物館へ行くまで、パラオの人々は日本統治時代について好意的な感情をもっている印象でしたが、必ずしも全ての人がそうではなかったのだと感じました。また、ある証言には”I have not told others this story until today.(これまで誰にも話したことは無かった)”と記されており、私には沖縄戦の様子を語ることをはばかる沖縄のご老人の姿とも重なって見えました。他にも集会場として使われたバイヤカヌーなどの復元模型などの展示もあり、今回の見学はパラオのことを深く理解する上で役立つ貴重な体験となりました。

○コロール州廃棄物管理事務所 (担当：棚原美緒)

本研修では、JICA海外シニアボランティアとしての活動後、コロール州政府と直接契約を結び現在もコンサルタントとしてパラオに貢献し続けている藤さんのお話を聞いたり、工場見学をしたりしました。パラオは、様々な国から支援を受けており、多くの食材や生活用品が輸入されているが最終処分場にする

土地の確保やゴミを処理するための予算の確保が課題となっているそうです。その現状を解決しようと2008年にパラオで唯一のリサイクルセンターが作られたそうです。

工場では、残飯や紙類などの家庭から出るゴミを活用してコンポストを製造したり、ペットボトルや空き缶などを資源として輸出したりしてコロール州から出るゴミの40%がリサイクルできていることがわかりました。また同施設には、JICA草の根技術協力事業の支援を受けているガラス工房も併設されており、ガラス工房では、空き瓶を使ってコップやピラス、ガラス細工などの製造・販売を行っていました。

藤さんは、「工夫するだけでは何も進まない。今やっていることを持続させるためには善意だけでなく資金なども考えつつ、パラオに住んでいる人々が使い終えた資源となるゴミを集めたくなる仕組みづくりが重要である。」とおっしゃっていました。また、パラオ人の特性を踏まえ、安くコンポストを販売したり飲料容器を持ち込んだ人へ5セント返還したりとあらゆる工夫と試行錯誤を重ねパラオに貢献をしている方でした。現在は、廃プラスチックをオイルに変え工場でする電気は自家発電によってまかなっているそうです。

特に印象的だったのは、「パラオのために何か貢献したい」という情熱的な思いをもって話す藤さんの姿です。パラオで活躍する日本人として、様々な課題や反発に立ち向かいながら新たな挑戦をするなど試行錯誤を重ねるその行動力は、多くの人に刺激を与えるだろうなと感じました。また、コロール州のみならず今後パラオ全土へこの技術が知れ渡ってほしいなと思いました。本研修での出会いや学び、感じたことなどを同僚や子ども達へ、還元したいです。



フィールドワーク8日目 8月16日(水)

〇ピースウィンズ・ジャパン（担当：伊集環）

本研修では、まず、ピースウィンズ・ジャパンの組織についての説明があり、NGO組織として、民間の立場から利益を目的とせず、国内外で活動を行っていることがわかりました。また、人々が紛争や貧困などの脅威に晒されることなく、希望に満ち、尊厳を持って生きる世界を目指すことを理念としており、各国政府だけでなく、このような組織がパラオのような開発途上国を支援していることを知ることができました。

次に、本組織のパラオでの活動のお話をお聞きすることができました。パラオの抱える医療的課題として、離島等へのアクセスの難しさ、車社会と肥満率の関連性などが挙げられており、沖縄県の抱える問題と非常に類似しているなと感じました。

また、医師が外国から派遣されていることや産婦人科医がいないこと、そもそも医者や養成機関がパラオ国内にないこと等、他にも多くの課題を抱えており、人口流出や食料自給率の低さなど、医療的な課題がどの問題ともリンクしており、1つの問題だけでなく、全ての問題に包括的に取り組む必要性を感じました。だからこそ、JICAの取り組みが求められているのではないかと感じました。

このようにパラオの抱える医療的課題をお聞きして、学校教育の中で子ども達へ予防的なアプローチを行うことはとても大切だなと思いました。私自身も学校教育を通して、沖縄の子ども達の健康への意識を高め、沖縄の抱える医療的課題を少しでも改善できればなと思いました。



○パラオコミュニティカレッジ（担当：村吉多賀子）

パラオコミュニティカレッジはパラオにある唯一の短期大学です。パラオの高校生が進学する場合、この大学に行くか海外の大学に進学することになります。そこでは大学教育と併せて農業や機械などの実用的な職業訓練も行われており、JICA海外協力隊の兒玉洋一さんがそこで支援を行っています。コミュニティカレッジの見学では、大学内の見学に加えて兒玉さんが実際に2人の学生に果樹栽培を教えている様子を見学することができました。教えられている学生は素直かつ熱心に兒玉さんの手伝いをしていました。以前三重県に行ったことがあるという1人の学生は、兒玉さんの指導に対しとても感謝していました。その後、私たちは兒玉さんからパラオの農業の現状や課題を教えていただきました。パラオは現在食料の多くを輸入に依存していること、自給率40%を目標にしているが、人々が農業にはあまり関心がないために人材不足が課題であることを学びました。JICAが行っている農業人材育成のプログラムが重要であり、兒玉さんがその中心を担っています。私たちは日本とは違う土壌で試行錯誤しながら現地の方々に農業を丁寧に教えている兒玉さんの姿に感銘を受けました。いつか兒玉さんの思いが実り、現地の農業人材が育ってパラオの食料自給率が飛躍的にアップすることを願います。



フィールドワーク9日目 8月17日(木)

○アイメリーク州廃棄物処理場（担当：池宮牧子）

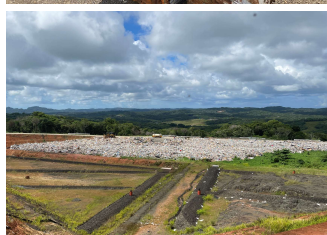
国立の廃棄物処理場を訪れ、JICA草の根技術協力事業である「バベルダオブ島における分別排出システムの普及促進事業」の現場を視察しました。実施団体である三重県ICETTのローカルコーディネーターである丸山さん、環境教育の分野で活動しているJICA海外協力隊の園田さん、現地スタッフ2名から話をうかがいました。



この廃棄物処理場は、準好気性埋め立て方式である福岡方式を採用し、25年間使用可能の予定で2020年に建設されたそうです。本事業では、この廃棄物処理場の適正管理をするとともに、住民が排出する廃棄物が適切に分別・リサイクルされるように、地域での啓蒙活動や学校での環境教育を推進しているとのことでした。今はフェーズ2に入り、分別排出システムをバベルダオブ島全域に普及することを目指しているそうです。



日本では焼却処分が一般的ですが、金額的負担が大きく、維持管理が困難ということで埋め立て処分している現状にまず驚きました。ゴミ分別の普及活動をしているものの、住民が分別することのメリットを感じていないこと、ゴミを有料化すると不法投棄が増えることが考えられることなど、推進することの難しさを感じました。



処分場の中には、スクラップメタルとして分別され、海外に輸送される処分コーナーも設けられていました。山積みになった車の多くが日本車であることを知り、生産する側にも責任を課す必要性も感じました。日本人が乗った車を中古車として途上国の人々が買い取り、その国で廃棄されるというのは、先進国である日本が、経済的優位性を利用して途上国で廃棄していることと同じであると感じたからです。持続可能なゴミ収集システムをともに考えていく必要性を感じました。

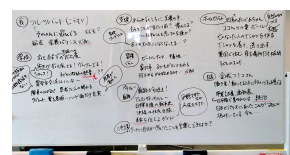
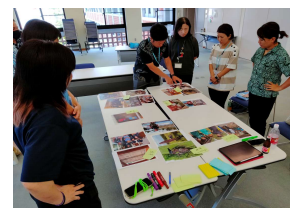
事後研修

第1回 8月19日（土）10:00-15:30 @JICA沖縄センター

講師/ゲスト	NPO法人沖縄NGOセンター 奥山有希氏
目的	①海外研修での気づきや学びを振り返る。 ②ワークショップのテーマを決める。

Program 1	内容	担当
	【海外研修振り返り】 ・写真からそのときの気持ちや印象を共有 ・共通するキーワードを挙げる	奥山有希氏

パラオの10日間で特に印象的だった場所や人、場面に関する写真を3枚ずつ選び、なぜ印象に残ったのか共有しました。パラオの文化に驚きを感じたり、戦跡を通して沖縄との共通点や平和教育について改めて考えさせられたり、人の生き方に触れ感銘を受けたり、援助のあり方について疑問を感じたりと、同じ行程ながら6名それぞれの気づきがありました。



Program 2	内容	担当
	【ワークショップテーマ決め】 ・海外研修で得た経験から何を伝えるかアイデアをだす ・どう伝える？手法や実践する際の大枠を考える	奥山有希氏

パラオで得た学びや気づきの内、何を伝える教材を作成するか話し合いました。研修開始当初は6名で1つの教材を作成することがゴールでしたが、それぞれ校種や担当教科が違うことや伝えたいテーマが異なるため、一つのテーマのもとそれぞれが教材を作成し、体系化することで「汎用性の高い教材」を目指すこととしました。



それぞれが現時点で想定するテーマや手法を共有し、講師の奥山さんからは開発教育ワークショップ作成にあたって重視すべき視点が話されました。

第2回 12月16日（土）10:00～15:30 @JICA沖縄センター

講師/ゲスト	NPO法人沖縄NGOセンター 奥山有希氏
目的	①ワークショップを作成する。 ②成果報告会に向けて準備する。

Program 1	内容	担当
	【ワークショップづくり】 ・作成、実践したワークショップの成果と課題を共有する ・それぞれのワークショップをどう体系化するか検討する	奥山有希氏

奥山さんのアイスブレイクで、年末の多忙な中での研修ではありましたが、緊張をほぐしてスタートしました。

パラオでの気づきをもとに、それぞれワークショップを作成し、各学校で実践した成果と課題を共有しました。お互いにフィードバックをし、児童・生徒が自事として捉えられるよう問いを改めて考え、さらに教材をブラッシュアップしていきます。

前回の事後研修からの課題であった、それぞれが作成したワークショップをどう汎用性の高い体系化された教材にするかについてアイデアを出し合いました。個々で作成したものではありましたが、パラオの事例を通して沖縄を振り返る部分が共通しており、「住み続けられる島を目指して～パラオを通して 沖縄をみつめ できることを考える～」というテーマでまとめることができました。



第3回 1月20日（土）10:00-16:00 @JICA沖縄センター

講師/ゲスト	かながわ開発教育センター 木下理仁氏
目的	①研修全体での学びや授業実践を報告する。 ②自身の成長を振り返り、一年間の学びを共有する。

Program 1	内容	担当
	【教師海外研修実施報告会】 ・パラオ研修実施報告 ・ワークショップ実践	教師海外研修 参加教員

国際理解・開発教育指導者養成講座参加者や視察先の方にパラオ研修での学びや気づきを報告し、その後、作成したワークショップ教材を実践しました。3名の教員がワークショップを実際に参加者に体験してもらいましたが、テーマにもあるようにパラオと沖縄を比較し考える内容であり、2つの地域の共通点の多さに皆さん驚いていました。

今回開発教育自体初めて挑戦する教員もいて、ワークショップ作りに苦戦したこともありましたが、互いに助け合い教師としてのスキルも向上したと思います。



Program 2	内容	担当
	<p>【特別プログラム「神奈川県における多文化共生へ向けた取り組み」】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップを通して外国につながりのある子どもたちの現状と支援のあり方を考える ・神奈川の歴史から「多文化共生」について考える 	<p>木下理仁氏</p>

かながわ開発教育センターの木下理仁さんから、神奈川県における多文化共生へ向けた取り組みについて講話いただきました。「愛子さんに何が起きたのか」のロールプレイでは、外国につながりのある児童・生徒の困りごとは一側面だけから見るのではなく、本人を取り巻く多くの人たちの協力を得て状況を考えることの大切さを知りました。「そもそも児童は困っているのだろうか。大人が決めつけてしまっていないか。」と感じることもあり、教室にいる児童に寄り添っていきたくと改めて思いました。

神奈川県の多文化共生への歴史を聞いて、初めて知ることや学ぶことが多く、とても有意義な時間になりました。



研修を終えて

小学校の英語専科教員として外国語教育に携わる中で、コミュニケーションで最も大切なのは、相手の立場や考え方を尊重し、お互いに認め合うことであると強く思うようになりました。週1～2時間の限られた外国語学習の中で私ができることは、国際理解教育を通じた実践だと考え、本研修へ参加を希望しました。

この研修で、私は多くの人と出会い、人間としての生き方や教師としての在り方を学びました。パラオでは、平和ツアーガイドをしている平野さん、コロール州廃棄物管理事務所の藤さん、ピースウィンズ・ジャパンの安間さんをはじめ、JICA海外協力隊として活躍する隊員の方々や現地の皆さまと出会いました。すべての方が使命感に燃えて、自分に何ができるのかを考えて活動していました。思いの実現に向かって行動している生き方に感動を覚えました。そして、JICAスタッフの方々やこの研修の目的をともにする教師海外研修のメンバー、国際理解・開発教育指導者養成講座の受講生との出会いを通して、改めて教師としての資質を磨き児童に還元していきたいという思いを強く持ちました。

出会った方々すべてに共通していることは、相手の文化や生活、考えを尊重し、決して自分の思いを押しつけることなく、必要なときは話し合い、相手の意見を受け入れてよりよい方策を追求していこうとする姿勢でした。このことはまさに私が子どもたちに伝えたいことでした。それを体験できたことは一番の学びでした。その貴重な経験は私の宝となりました。本当にありがとうございました。全ての方との出会いに感謝いたします。



池宮牧子

台風6号の影響により1週間遅れのスタートとなった教師海外研修。街中を走る日本車、時折聞こえるカタコトの日本語。今年度は「日本」が今も息づいている国、パラオで行われました。

本研修では、国際協力の一環として様々な分野で活躍している日本人から話を聞ける機会が幾度かありました。話を聞いて共通していると感じたことは、逆境を楽しむ姿勢、パラオの発展に貢献したいという熱い気持ちでした。年齢関係なく、どの方もとても輝いた眼差しをしており、同じ日本人として誇らしい気持ちになりました。また、パラオ滞在中は太平洋戦争時の史跡を多く見ることができました。我々の祖先がこんな遠い地で国のため、愛する人のために、どんな気持ちで命を落としていったのかと思うと、とても胸が苦しくなりました。78年経った今もそのまま残された日本軍の戦車や零戦を直に見て触れたことで、戦争が単なる遠い昔の出来事ではなく、今と繋がっているとハッキリと感じとることができました。

更に、貴重な経験として、パラオ国内の小学校で授業を担当させてもらうことができました。英語が苦手な私にとっては、大きな挑戦であり、不安でいっぱいでした。しかし、いざ学校を訪れてみると、パラオの子どもたちの人懐っこさ、笑顔に迎えられ、また、JICAボランティアのサポートもあり、楽しく授業を終えることができました。帰る頃には、もっとここで授業をしてみたいと思ったほどです。私達は、今回の研修では、パラオの文化、抱える課題、沖縄との繋がり、平和教育、世界で活躍する日本人の事等、多くの事を学ぶことができました。私のパラオでの学びを通して、視野を広く持ち、世界に目を向ける子が一人でも多くなれば幸いです。

最後に、研修を支えてくださったJICA関係者スタッフの皆様、共に学んだ県内の先生方、このような機会を与えてくださった全ての方に感謝したいと思います。ありがとうございました。



伊集環

私は教員として採用される前、沖縄の伝統芸能（創作エイサー）団体へ所属しており様々な国へ訪れたことをきっかけに、以前から海外への興味関心が強くありました。また、6学年を担任して二年目となり、社会科の学習で地球規模で考える社会の課題解決に関する学習において私にしか伝えられないことがあるのではないかと考えJICAの情報を収集しはじめた頃、本校の校長先生から教師海外研修があることを教えていただいたことが本研修参加のきっかけです。いずれは、JICA海外協力隊として海外の学校で働いてみたいという目標も見据えている私にとって良い機会となりました。

JICAを訪問することも初めてであり、事前研修ではフォトランゲージ、貿易ゲームなど多くの手法や教材作成の手順などを学び、パラオ出発前から多くの刺激をもらいました。パラオ現地では、福祉施設や小学校でのジョブシャドウイング、ホームビジットなどパラオの暮らしや文化に触れるだけでなく、パラオの発展に尽力する人々との出会いも多く、日本から遠く離れた場所ですが、実はつながりのある国であることも学びました。SDGsと関連させた教材を作成しながらも、国際理解の教材を自ら行動して学べたことは貴重な経験だと感じました。

本研修を終え、今回の経験を子供たちへどのように伝えようか、どのような授業を作ろうかという想像で、これまでに体験したことのない感情がこみあげました。私の経験を教材化することで子供たちは世界をより身近に感じ、日常生活では予想することのできない考えや疑問が思い浮かぶ姿を想像すると益々楽しみになってきます。子どもたちが様々な分野に目を向け目標へとつなげるためにも、多くのきっかけを子供に与え続ける教師でありたいです。そのために、私自身も視野を広くもち様々な分野に挑戦し学び続けていきたいと感じました。海外研修への参加を激励してくれた職場の先生方や事前研修からこれまで出会ったすべての方が私に多くの経験と学びを与えて下さりました。ありがとうございました。



棚原美緒

2023年度の教師海外研修（パラオ共和国）を通して、国際協力やパラオの現状など、多くのことを学ぶことができました。また、実際に戦跡を訪れたり、現地の人々にインタビューをするという貴重な体験ができたことが自分にとって大きな財産になったと思っています。

特に印象に残っているのは、パラオのイボバン小学校（5歳～14歳までの児童生徒が11名在籍する小さな学校）を訪れ、子ども達と交流したことです。学校に到着するなり、「センセイ、センセイ！」と笑顔で話しかけてくれ、一緒にラジオ体操をしたり、給食を食べたりする中で、彼らの優しさや人懐っこさにとっても癒やされました。その時に「やっぱり私は教師という仕事が好きだな。」と改めて自分自身の考えに気づき、未来ある子ども達をサポートするこの職業を一生懸命頑張りたい！という気持ちにさせてくれました。

本研修中には、ペリリュウ島を訪れ、戦車や防空壕などを実際に見たり、現地の家庭に入り、半日を一緒に過ごすなど、沢山の貴重な体験をすることができました。「百聞一見にしかず」という言葉があるように、実際に見たり、触れたりするなど、五感をフルに使って体験することはとても重要なことだと改めて感じました。今後、私が体験したことを活かして、SDGsと関連した教材を作ったり、子ども達に国際協力や海外で起きていることを伝えるなどして、教育現場に還元していきたいと思っています。

今回、このような大変素晴らしい機会を与えていただき、JICAとJOCAのスタッフの皆さんに感謝しています。また、一緒にパラオ研修に参加をした5人の先生方、同行して下さったスタッフの皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



浦崎政成

研修を終えて

2021年度、JICA沖縄主催の教師国内研修で広島県の安芸高田市や原爆ドームを訪問予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、現地へ赴くことはできず、オンラインによる研修を受けました。この研修が「平和教育」を考えるきっかけとなり、沖縄から県外へ、また世界へと目を向けるようになりました。

今年、JICA沖縄が主催する教師海外研修がパラオだと知り、今度こそ現地へ赴き、自分の五感で感じたことを教材にしたいという思いで応募しました。パラオ研修では、座学では学べないことを本当にたくさん得ることができました。私はここ数年、平和教育について考える機会が多く、県系2世の金城史子さんへのインタビューや、戦跡がそのまま残っているペリリュー島のフィールドワークが特に印象に残っています。ちょうど、7月に沖縄県生活福祉部女性力平和推進課主催、株式会社うなゐ沖縄が企画・運営した平和教育指導者養成講座フィールド編で、読谷村の戦跡を巡り、教材を作る講座に参加していたこともあり、沖縄戦とペリリュー島の戦いを比較しながら見ることができました。ペリリュー島の戦いを経て、沖縄戦に向かった米国海軍の話聞きながら、歴史はすべて繋がっていること、過去から今、今が未来へ繋がっていると実感しました。また、戦跡以外でも現地の公立学校の見学や授業実践、朝・夕のマーケットやホームビジットでパラオの人々の暮らしに触れ、世界が繋がっていることも改めて知ることができました。

この研修を通して、私は、目の前にいる子ども達に、今の行動が未来に繋がっていること、自分が世界と繋がっていることを知って欲しいと思いました。実際に思いを形にし、実践する過程を通して、生徒と共に成長できたように感じます。「学び続ける教師」が求められ、質の高い研修を勝ち取っていかねばならない今、研修を受けた自分自身の資質向上だけを考えるのではなく、同僚や子どもたちにも還元していくことを忘れてはいけないと思います。このような機会に恵まれ、感謝するとともに、どのように教育現場に還元できるかを常に考えていこうと思います。



大城真紀子

「生徒の世界を広げたいならまず教師自身の世界を広げなくては」

長らく学校現場で世界史や地理などを教えている中で、自分で直接見てきたものを伝えたいという思いがどんどん高まっていきました。教師海外研修に応募したことのひとつにはそのような動機があったからです。昨年参加した国内研修でも多くの学びを得ることが出来ましたが、今回は海外。しかもパラオ！どのようなことを見て、聞いて、感じるができるのだろう。ワクワクから始まった研修でした。ところが台風で延期。（いや中止かもしれない…）かなりショックではありましたが、最も大変なのは企画して下さったJICAやJOCAの皆さん。実施出来ることを祈るしかない状況でした。数日後、実施出来ることになり、心躍る思いで空港へと向かうことができました。感謝の気持ちでいっぱいです。

現地では様々なことを体験しました。しかしその体験は「面白い」という言葉だけでは済まされない、様々な違和感やひっかかりを伴うものでもありました。ペリリュー島の戦争遺跡、県系人へのインタビュー、街中にある「〇〇国からの援助によってつくられました」というランドマークの多さ…。研修中、毎日出てくるこれらの違和感について同じく参加した先生方やスタッフの皆さんと毎晩共有し、話合うことが出来たことが私にとって最高の環境でした。その意味でも私自身の世界はぐんと広がったと思います。これからどのようにこの研修の成果を目の前の生徒達に還元していくことができるか、現地で感じた違和感やひっかかりを生徒とどう考えていくか、生徒たちの見えている世界を少しでも広げることができるか、とても楽しみです。

この研修を成功させるために準備して下さったスタッフの方々、研修先でお世話になった方々、また10日間の研修を一緒に切磋琢磨してきた仲間の皆さん、どうもありがとうございました。



村吉多賀子

ワークショップ集

ここからは、研修の中で作成されたワークショップを掲載します。
今年度は一つのテーマのもと、参加教員それぞれが汎用性の高いワークショップを作成しました。
小学校・中学校・高校の各校種で、対象となる児童・生徒の発達段階に応じて、「発問」を変えて使える教材となっております。ぜひ授業などでご活用ください。

住み続けられる島を目指して

～パラオを通して 沖縄を見つめ できることを考える～

★食文化の違い 25

「パラオと沖縄の食文化の似ている所や違いを通して、異文化理解の大切さを伝える」



★食料自給率から考える食材選び 29

「給食メニューの食料自給率調べを通して『考えて選択することの大切さ』を伝える」



★パラオってどんな国？ 33

「パラオの暮らしの写真を通して日本との暮らしの違いを伝える」



★パラオと沖縄の健康問題 46

「パラオの子ども達のラジオ体操を通して、パラオと沖縄の健康問題について考える」



★パラオを通して、「平和」を繋ごう 51

「ペリリュー島と沖縄の戦跡を通して、『負の遺産』を残す意義について考える」



★パラオと沖縄 どっちがどっち 53

「パラオの歴史・文化・課題を通して、沖縄の魅力や課題を発見する」



作成者が関連すると考えるSDGsのゴールを載せています。
ワークショップ選択の参考にさせていただきます。

食文化の違い



ワークショップのねらい

パラオと沖縄の食文化の似ている所や違いを通して、異文化理解の大切さを伝える

教材内容

所要時間 **15**分

対象 **小学3年生**

教科・ **3年道徳**

単元例 「ぼくのおべんとう」

準備するもの

写真

- ①フルーツバットスープ
- ②沖縄独特の食事

進め方

時間	活動内容・問い	予想される反応	備考
5分	Q1：これは何のスープで、どこの国の料理でしょう？	「気持ち悪い」「まずそう」「コウモリを食べるの？」	写真①
5分	Q2：これは何の動物を使った、どこの料理でしょう？ 沖縄の独特な料理の写真をいくつか提示する。	「蛇のスープかな？」「ミンチみたいになってるけど、何の肉かな？」	写真② グループで考えさせる。
5分	Q3：パラオのフルーツバットと、沖縄の独特の料理の写真を見て、どんな事を考えましたか？ 食文化の違いを通して、異文化理解や他者理解の大切さを伝える。	「沖縄も他から見れば、変わった食べ物を食べているんだね」「世界には色々な文化や色々な人がいるんだね」	

作成者からのコメント

パラオ共和国と本県の独特な食文化から、異文化理解を深める授業である。子どもたちは自分たちが食べているものが普通であると考えがちである。他国や他地域から見ると本県の食文化も独特なものであること、違って当然であり、違いを受け入れることの大切さを授業を通して伝えたい。



伊集環
豊見城小学校

写真① ※作成者撮影

(写真解説)

パラオ料理「フルーツバット（こうもり）のココナッツミルク煮」



写真②-1 ※作成者撮影



(写真解説)

沖縄料理「ヒージャー（やぎ）の刺し身」

写真②-2 ※作成者撮影



(写真解説)

沖縄料理「チーイリチー（豚の血の炒め物）」

写真②-3 ※作成者撮影



(写真解説)

沖縄料理「ヒートゥー（イルカ）の炒め物」

写真②-4 ※作成者撮影



(写真解説)

沖縄料理「イラブーシンジー（うみへび汁）」

食料自給率から考える食材選び



ワークショップのねらい

給食メニューの食料自給率調べを通して「考えて選択することの大切さ」を伝える

教材内容

所要時間 **90**分

対象 **小学5年生**

教科・**社会**

単元例 **(・外国語)**

準備するもの

タブレット端末
自分たちで考えたリクエスト給食メニュー
ワークシート
食料自給率計算ソフト



「食から日本を考える。ニッポンフードシフト」公式ウェブサイト
<https://nippon-food-shift.maff.go.jp/calc/#/>

単元概要

外国語：I'd like pizza. 「みんなが学校栄養士！リクエスト給食メニューを作ろう」

社 会：これからの食料生産とわたしたち

〈外国語〉

次	活動内容
1	単元の見通しを持つ。レストランで店員と客の間で交わされる会話を想起する。
2	英語表現を使ってロールプレイをする。
3	学校栄養士から給食献立の作り方を聞き、献立作りで大切にしていることを知る。
4	学校栄養士の立場に立ってリクエスト給食メニュー作りをする。 ※資料3
5	リクエスト給食メニューを紹介する。投票によりメニューを決定する。学習のまとめをする。

〈社 会〉

時	活動内容
1	食料自給率について知る。食材を選択する際の優先順位を考え、共有する。※資料1
2	日本の食料自給率の現状や食料輸入のメリット・デメリットについて調べる。
3	世界の食料事情や食料の輸送に伴う環境負荷について調べる。パラオでの食の変化を知る。※資料2
4・5 本時	食料自給率計算ソフトを活用し、自分たちで立てた給食メニューの食料自給率を調べる。 計算で算出した食料自給率を伝え合う。食材を選択する際の優先順位を再度考え、共有する。

進め方

時間	活動内容・問い	予想される反応	備考
5分	学習内容を捉える。	前時までの内容を再確認する。	前時までに使った掲示物を準備する。
15分	食料自給率計算ソフトの使い方を知る。 練習としてカレーライスの食料自給率を計算する。	カレーライスに入れる具材について検討する。	児童の端末に食料自給率計算ソフトのURLを配布する。
5分	Q1：どうして同じカレーでも食料自給率が違うのかな？	「入れる具材によって食料自給率が違う」 「米の自給率は高い」	
15分	自分たちで作ったリクエスト給食メニューの食料自給率を計算する。	食材を選ばずに作ると食料自給率は低くなることに気づく。	外国語の時間に作成したリクエスト給食メニューを配布する。
5分	算出した自給率を全体で共有する。	メニューや食材により食料自給率が違うことに気づく。	
10分	Q2：地元の食材を使うと自給率はどうなるかな？ 食材の産地に「国産」を選択するように説明して、再度計算する。	食材を選ぶことにより食料自給率は上がる。	
5分	全体で共有し、気づいたことを出し合う。	「郷土料理は地元の食材を活用して作れるものが多い」	
15分	Q3：地元の食材を使うことのメリット・デメリットはなんだろう？ 食材の輸送コストや価格等について検討する。	〈メリット〉 「安心安全な食材である」「地域の産業の活性化になる」「輸送コストが低い」 〈デメリット〉 「輸入食材より価格が高いものが多い」「手に入らないときがある」	前時までの学習をふり返る。メリット・デメリットを踏まえて選択することができるようにする。
10分	Q4：お店で食材を購入するとき、大切にしている基準は何ですか？ ダイヤモンドランキンググループで共有する	「同じ価格だとしたら地元の食材を選びたい」 「郷土料理を食べることで自給率が上がる」	ワークシート 自分の考えを持てるようにする。 第1時からの変容を確認する。
5分	学習を振り返る。	「メリット・デメリットを考えて選んでいきたい」 「郷土料理の良さが分かった」	

作成者からのコメント

外国語と社会科の横断的な学習及び家庭科と関連づけにより、学習で得た「知識・技能」を活用し深めることができた。
沖縄での食の変化を捉えるのが難しい児童が多かった。家庭と連携してインタビュー活動を入れるなどすると、パラオとの共通点や相違点を見つけやすくなり、自分たちの食生活の課題を捉えることができると感じた。

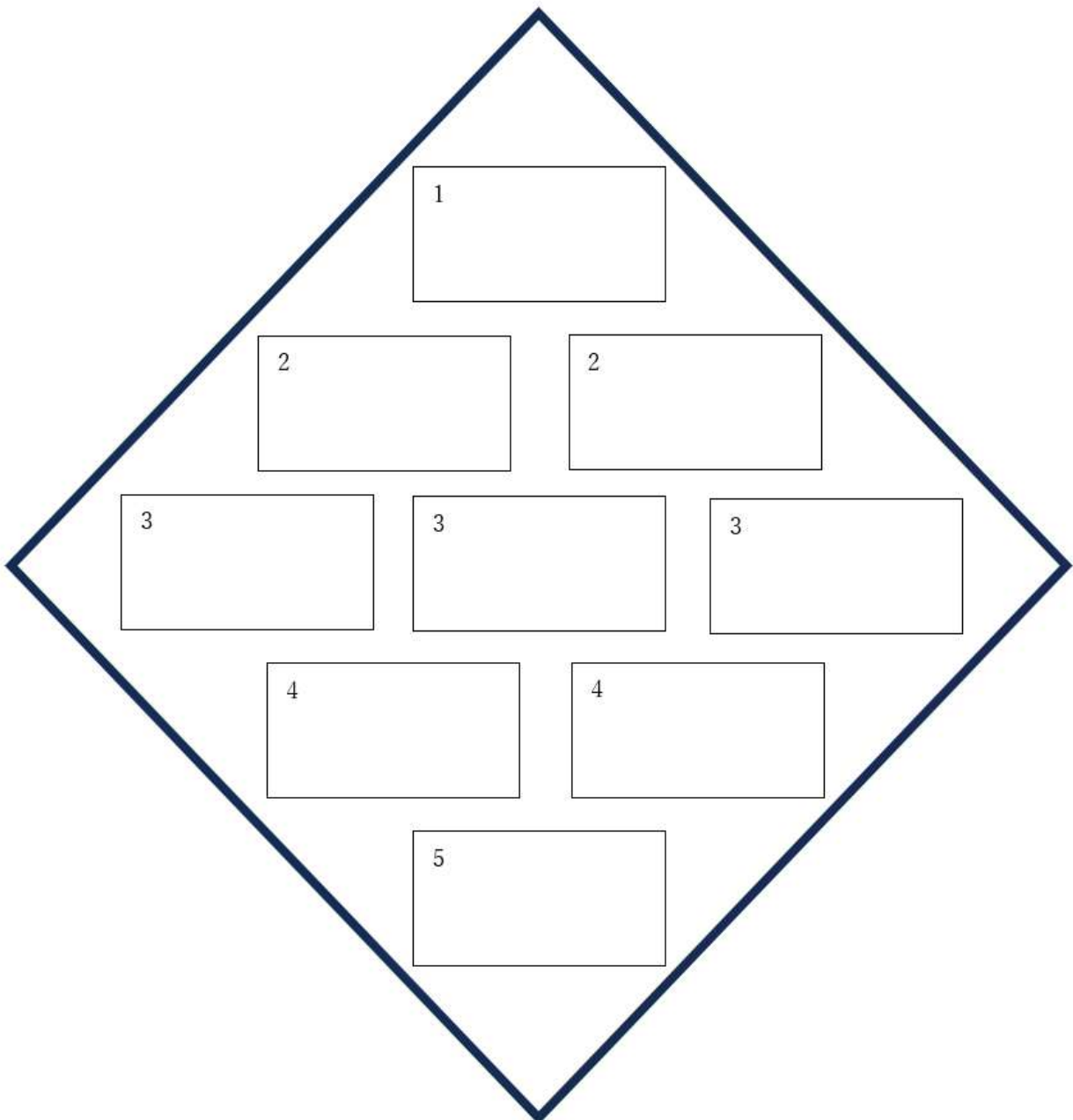


池宮 牧子
東江小学校

ダイヤモンドランキングで考えをシェアしよう

お店で食材を購入するとき、大切にしている基準は何ですか？

価格	産地	見た目	新鮮さ
安心・安全	消費期限・賞味期限		
便利さ	添加物	ブランド	



【資料2】 パラオの食の変化を伝える資料



【資料3】 外国語で作るリクエスト給食メニュー例

This is my menu ! Name: Makiko Ikemiya

Menu: ちらし寿司
春雨サラダ
茶わんむし
ひなあられ
乳酸菌飲料

使った冬の食材：
にんじん・三つ葉

使った地元の食材：
にんじん・きゅうり
しいたけ・三つ葉
卵・エンドウ・鶏肉

パラオってどんな国？



ワークショップのねらい

パラオの写真を通して日本との暮らしの違いを伝える

教材内容

所要時間 **45分**

対象 **小学6年生**

6年社会

教科・
単元例 **「日本とつながり
の深い国々」**

準備するもの

パラオクイズ
写真（パラオの暮らし、4枚）
ホワイトボード
ホワイトボードマーカー
SDGsアイコンカード



<https://www.jica.go.jp/cooperation/learn/material/sdgs/card.html>

進め方

時間	活動内容・問い	予想される反応	備考
3分	Q1：どっちがパラオの写真でしょうか？	沖縄とパラオの写真を比べどちらがパラオかを考える。 沖縄とパラオの共通点に気づく。	パラオクイズ
2分	めあてをたてる 「パラオ共和国ってどんな国なのだろう」		
10分	Q2：これから写真を配ります。配られた写真を見て、何か気づいたや感じたことはありますか？また、写真に写っている人物がどんなことを言っているのかを想像して写真のまわりに書きこみましょう。 (フォトランゲージ)	写真のまわりに気づいたことや想像できることを書き込む。 グループごとに書き込んだことを発表する。	予め4グループに分け、各グループへ異なる写真（1枚ずつ）を配布する。
7分	写真の解説を行う	解説を聞いて、パラオ共和国の様子を知る。	写真解説参照 フォトラン写真+αの写真で解説する。

3分	Q3：解説を聞いてどんなことを考えましたか。またSDGsのどの項目と関係しそうですか？SDGsのアイコンカードを並べてみよう。	各グループで感じたことを理由とともに話し合い、あてはまるSDGsカードを写真のとなりに並べる。	SDGsアイコンカード 困っている場合はSDGsの目標と関連する箇所に着目できるような声かけを行う。
10分	Q4：隣のグループとお互いの選んだアイコンカードとその理由を伝え合いましょ。	・各グループで交流し、自分たちのグループの写真に追加したいSDGsカードがあれば追加する。 ・グループで話し合ったことや選んだカードとその理由について全体へ共有する。	グループ交流は1つにし、教師が指示を行う。（例：自分たちの右隣にいるグループなど）
7分	Q5：写真の地域に住む方々へ伝えたいことはありませんか。話し合ってミニホワイトボードに書きましょ。	解説や関連のあるSDGsアイコンカードを見て感じたことや、課題がある場合はその解決方法を話し合い、ホワイトボードへ書き込む。 グループごとに発表を行う。	ホワイトボード 自分事として捉え、持続可能な解決方法を見つけられるような声かけを行う。
3分	振り返り	今日の学習で感じたことや考えたこと、驚いたことを書く。	ふりかえりの視点を与える。（SDGsに関して感じたことや考えたこと、驚いたことなど）

作成者からのコメント

社会科で国際理解や地球環境に関する授業を行うため、その導入としてパラオの暮らしを伝える授業を実施。パラオ共和国の写真から、日本との暮らしの違いや共通点を見つける授業。本授業をきっかけに身近な地域課題を探し、課題解決へ向かう授業構成となっている。パラオをきっかけに様々な国へ興味を持つきっかけとなしてほしい。



棚原美緒
宮森小学校

クイズ① どちらがパラオでしょう？

1



2



1. 沖縄

2. パラオ：ペリリュー島南岸

クイズ② どちらがパラオでしょう？

1



2



1. 沖縄

2. パラオ：公園でのローカルマーケット（コロール州）

クイズ③ どちらがパラオでしょう？

1



2



- 1.パラオ：パラオの伝統的建築物バイの壁面絵画
- 2.沖縄：八重山の伝統行事アンガマで使用されるお面

クイズ④ どちらがパラオでしょう？

1



2



- 1.パラオ：パラオの伝統的ダンス（ナイトマーケットにて撮影）
- 2.沖縄：エイサー

クイズ⑤ どちらがパラオでしょう？

1



2



1.パラオ：Tamaと呼ばれる揚げパン

2.沖縄：サーターアンダギー

フォトランゲージ用写真



フォトランゲージ用写真



フォトランゲージ用写真



フォトランゲージ用写真



解説用写真





(写真解説)

写真	解説
  	<p>【コロールリサイクルセンター】</p> <p>空き缶や空き瓶をリサイクルするだけでなく、プラスチックを燃料へかえ、リサイクルセンターの電力をまかなっています。また生ごみを発酵させ、たい肥化して再利用しているそうです。この男性は工場のオーナーさんです。</p>
	<p>【ミューズ小学校】</p> <p>パラオ共和国の中で3番目に大きな学校です。パラオの義務教育は、小学校1~8年生と高校(1~4年生)までとされ小学校7・8年生は日本の中学1・2年生です。全児童150人のため、各学年1クラス。そのため、2つの学年合同で体育の授業を行います。この写真は、2・3年生が体育の学習をしているところですが、この学校には体育館がありません。この日の天気が、雨だったため教室でダンスの映像を流し、踊っています。日頃の体育は、外で鬼ごっこ・かけっこを行っているそうです。</p>



【イボバン小学校】

ガッパン州という小さな村で、ご近所さんはみんな家族や親せき。小学校全児童の人数は12人。なんと、先生や校長先生も親せきだそうです。写真に写る日本の国旗が貼られているのは、水道です。なぜ、日本の国旗が貼られているのでしょうか。日本は昔、パラオ共和国を植民地としていた時代がありました。長い歴史上での絆と経済的なつながりがあるようで、パラオと日本は、親密な友好関係にあります。日本はパラオの経済的繁栄のために様々な開発協力を行ってきており写真の水道だけでなく、パラオの街を歩くと様々なところで日本の国旗が貼られた案内板をみかけました。



【ゴミ分別所】

パラオでは食料を含む生活物資の多くを輸入しています。経済の発展と同時にパラオ人の生活様式が大きく変化していき、廃棄物の増加傾向が著しくなりました。パラオでは、家庭から出るごみは、ほぼ分別せずに家の前のドラム缶に捨て、それをトラックで集めて埋め立て処分場に捨てています。それでは、新しく処分場を作ってもすぐに埋まってしまう。そこで、資源物の回収ステーションを設置して、住民に対する啓発を行いながら、「パラオの家庭から出るごみを分別回収して可能な限りリサイクルしよう！」という活動を推進しています。しかし、パラオ全域での実施は難しいため2か所の対象地域で開始しました。この写真は、JICAが設置したパラオのガッパン州・アイメリーク州にあるゴミ分別所です。分別のしかたは、日本と同じかな？



パラオと沖縄の健康問題



ワークショップのねらい

パラオの子ども達のラジオ体操を通して、パラオと沖縄の健康問題について考える

教材内容

所要時間	35 分
対象	小学校高学年～ 中学生
教科・ 単元例	学活 保健週間

準備するもの

タブレット端末
Jamboard

進め方

時間	活動内容・問い	予想される反応	備考
5分 導入①	Q1：SDGsの目標の中で、興味や関心のある目標は何ですか？その理由は？	貧困をなくそう 平和 飢餓をゼロに	スライド資料1～2
5分 導入②	Q2：パラオの子ども達何をしているんだろう？ Q3：ラジオ体操を始めたきっかけは何だろう？ めあての確認 「すべての人に健康と福祉を」について考えてみよう	A1:パラオダンスかな。 A2：ラジオ体操が流行っている	スライド資料3～4 写真
10分 展開①	・パラオの現状（健康問題）について知る Q4：沖縄にはどういう健康問題があるだろう？ Jamboardの付箋紙に自分の意見を書き、ペアでシェアする。	A3:「生活習慣病」	スライド資料5～7
5分 展開②	Q5：パラオや沖縄の健康問題を改善するための解決策や自分ができることを考えてみよう	A4:「野菜を多く食べる」 「パラオ人に野菜の美味しいレシピを教える」	スライド資料8

5分 展開③	パラオのために活動する日本人や団体 について知る		スライド資料9～10
5分 まとめ/ 振り返り	授業で感じたことを書く		

作成者からのコメント

「パラオの子ども達が日本のラジオ体操をしているなんて面白い！」と最初は思ったのですが、始めるきっかけやパラオの健康問題を学ぶことで、「沖縄にも類似した問題点があるのでは？」と思い、このような教材を作成しました。また、パラオの医療問題を改善するために活動しているNGO団体など、国際協力に尽力している人々に感銘を受けたので、ぜひ紹介したいと思います。



浦崎政成
黒島中学校



(写真解説)

パラオにあるイボバン小学校では、朝8時と給食後の12時に児童生徒が中庭に集まってラジオ体操をしています。数年前に、JICA海外協力隊としてイボバン小学校に派遣された日本人の教師が「子ども達が少しでも体を動かす機会を増やしたい」という想いでラジオ体操を始めたそうです。写真に写っている子ども達は、楽しそうに日本の子ども達と同じようにラジオ体操をしていました。

スライド資料

17の目標がありますが、どれくらい知っていますか？

ペアで話し
てみよう



1

自分の考えを
書いてみよう！

1 一番興味や関心のある目標は何か？その理由は？

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



2

ペアで話し
てみよう

パラオにあるイボハン小学校です。
お昼休みに子ども達は何をしているのだろう？



パラオは、西太平洋のミクロネシア地域に位置する小さな島国で、人口は約18,000人

3

ペアで話し
てみよう

ラジオ体操を始めたきっかけは何だろう？



4

※写真解説参照


めあて：SDGs③の目標について皆で考えてみよう👏

3 すべての人に
健康と福祉を



5

パラオの現状



- ①運動をする習慣がなく、様々な健康問題がある。
- ②パラオの平均寿命は男性71歳、女性75歳
(日本人は男性81歳、女性87歳)
- ③パラオ人は野菜を食べる量も少ない
- ④医師不足が深刻な問題で、総合病院が国内に一つだけ。

6


パラオで活動している特定非営利活動法人ピース
ウィングス・ジャパンの方からお聞きした内容です。

①自分の
考えを書く

②ペア
でシェア

実は、沖縄県でも健康問題が深刻になっている。
どういった問題があるか挙げてみよう！

付箋紙に自
分の意見を
書いてね👏



生活習
慣病

運動
不足

7

①自分
の考え
を書く

②ペア
でシェア

パラオや沖縄の健康問題を改善するために考えられる解
決策や自分ができることを考えてみよう！！

付箋紙に自
分の意見を
書いてね👏

パラオ人に
野菜の美味
しいレシピ
を教える

野菜を
多く食
べる

8

パラオ人のために活動する人たち①

「パラオの食文化を変えたい！」



20種類の無農薬野菜

写真提供：依田貴美枝

パラオで農業をしている依田貴美枝さん

9

パラオ人は野菜を食べる習慣が少なく、生活習慣病が問題になっている。また、スーパーに売られている野菜も外国からの輸入品が多く、パラオ産の野菜は少ない。この問題を少しでも改善したいという想いで、野菜を作り始めた依田さん。

パラオ人のために活動する人たち②

Criteria

1. Persons with **NO NCDs**
2. Person 15years old or older

2023 August Health Screening Schedule

State	Date & Time	Place
Palau	August 9 th Wed 10:00am - 3:00pm	State office
Angaur	August 10 th Thu 10:00am - 2:00pm	Community Center
Koror	August 11 th Fri 4:00pm - 8:00pm	PCC, Assembly Hall
	August 12 th Sat 10:00am - 4:00pm	PCC, Assembly Hall

Health Screening Includes:

First Screening:
Height, Weight, BMI, Blood Pressure, Urine Test, Blood Test (HbA1c), Consultation by a Doctor

Secondary Screening:
Ultrasound, SBCT, Blood test (Cholesterol, Creatinine etc.)

写真提供：ピースウィンズ・ジャパン

ピースウィンズ・ジャパンは国内外で医療支援活動を行うNGO組織です。2021年3月より、パラオ共和国において、巡回検診・診療と生活習慣病の予防体制の強化を目的とした事業を実施しています。パラオにある小さな離島にも船で行き、検診を行っています。

10

パラオには大きな国立病院が一つしかなく、医療体制が十分ではないため、ピースウィンズ・ジャパンが巡回検診などの医療サポートを行っている。

パラオを通して、「平和」を繋ごう！



ワークショップのねらい

ペリリュー島と沖縄の戦跡を通して、「負の遺産」を残す意義について考える

教材内容

所要時間 **10分**
 対象 中学生～
 一般
 教科・単元例 道徳、総合
 平和教育

準備するもの

スライド資料

- ・ペリリュー島（掩体壕、トーチカ、千人洞窟、戦車、砲台跡）
- ・沖縄（読谷村の掩体壕・トーチカ・シムクガマ、南城市大里のカノン砲、旧陸軍第32軍司令部壕第5坑口）

進め方

時間	活動内容・問い	予想される反応	備考
3分	Q1：沖縄・パラオそれぞれどちらの「戦跡」写真でしょうか？	直感的に答える生徒や既知から推測して応える生徒など	資料(1)～(3)参照 ※じっくり写真を見せて考えさせる
2分	Q2：沖縄とパラオの「戦争」における共通点は何だろう？	「島国」→「地上戦」 「住民の被害が多い」	資料(4)～(5)参照 ※生徒の率直な意見を言わせる
3分	Q3：ペリリュー島の課題は何だろう？	「戦跡の管理」 「平和に対する考え方」	資料(6)～(7)参照 ※写真の説明と発問
2分	Q4：沖縄の戦跡もちゃんと管理されると言えますか？私たちの平和への意識は？	「できていると思っていたけど自分たちもできていない」 「知らない戦跡がある」	資料(8)参照 ※パラオの課題だと思っていたことを沖縄（自分事）の課題に！

作成者からのコメント

短くて、朝の会や導入など様々な場面で、さっとできる10分ワークにしました。最後の問いが生徒をもやもやさせるものになっていたのがよかったのですが、単発だともったいないので、平和月間や他の教材の導入に使う方が効果的だと感じました。



大城真紀子
豊見城中学校



(1) 掩体壕の写真

左：読谷村 右：ペリリュー島



(2) トーチカの写真

左：読谷村 右：ペリリュー島



(3) 洞窟の写真

左：読谷村 (シムクガマ) 右：ペリリュー島 (千人洞窟)



(4) 共通点を考える



(5) 「地上戦」という共通点



(6) ペリリュー島の現状



(7) ペリリュー島で感じた課題



(8) 「ジブンゴト」への意識

パラオと沖縄 どっちがどっち？



ワークショップのねらい

パラオの歴史・文化・課題を通して、
沖縄の魅力や課題を発見する

教材内容

所要時間 **30～50**分

準備するもの

対象 小学生～高校生
教科・ 社会科、探究学習
単元例 地理総合

パラオ・沖縄どっちがどっちカード
「パラオへの旅」シート
ワークシート

※本教材は「社会編」「歴史・伝統編」「学校生活編」の3つのバージョンでカードとワークシートを作成しています。

進め方

時間	活動内容・問い	予想される反応	備考
1分	【授業への導入】 Q1：パラオについて知っていますか？	知らないか、知っていても限定的	時間があれば、Youtubeでパラオについての動画を観せても良い。
5分～7分	【パラオについて知る】 Q2：「パラオへの旅」から、パラオについて基本的な情報を読み取ろう。 「パラオへの旅」を読んで、ワークシート1を記入する。	「海洋性の熱帯雨林気候」 「島嶼国」「赤道近く」 「国際協力が根付いている」など	出来ればグループの代表者に黒板に板書してもらおう。 ※時間が無い場合は紹介文の単語や文章を○で囲む。
10分	【カードゲーム】 Q3：カードを配ります。このカードは沖縄、パラオどちらかについて書かれたものです。文章で判断して、沖縄とパラオそれぞれを分けてください。 グループで相談してカードを分ける。		どっちがどっちカード生徒がどのカードで迷っているかを確認しながら机間巡視を行う。

5分～10分	<p>【正解の発表と解説】</p> <p>カードについて説明を行う。</p> <p>Q4:意見が分かれたカードはどのカードですか？</p>	<p>教師の説明を聞きながら、意見が分かれたカードやゲーム中に得た気づきを全体場で共有する。</p>	<p>カードの裏にパラオと沖縄それぞれに関連するような画像を印刷し、パズル合わせのようにして正解発表をすることもできる。</p> <p>印刷していない場合は口頭で発表する。</p>
5分	<p>ワークシート2を記入する。</p> <p>Q5:ゲームを通して、印象に残ったカードについて記録しよう</p>	<p>「肥満率、パラオと沖縄似ているなあ」</p>	
10分 歴史・伝統編 学校生活編	<p>【ふりかえり】</p> <p>ワークシート3を記入する。</p>	<p>ワークシートをまとめ、活動をふりかえる。</p>	
20分 社会編	<p>【ふりかえり】</p> <p>ワークシート3,4を記入する。</p> <p>Q6:解決すべき課題の優先順位をグループで考えよう。</p> <p>解決すべき課題の優先順位を考える。(④以外)</p> <p>その際、順位を決めた理由を考える。</p> <p>ワークシート4を記入する。</p> <p>Q7:活動全体をふりかえってみよう</p>	<p>例①⇒②⇒⑤⇒⑥⇒③</p> <p>理由:人の命や健康が重要だと思うから</p> <p>グループ内で優先順位の意見が分かれる場合もある。</p> <p>活動全体をふりかえる。</p>	<p>④は文化・慣習のため除外する。</p> <p>理由を考えることで、人によって課題の重要度も異なることを知る。</p>

作成者からのコメント

パラオと沖縄を「社会編」「歴史・伝統編」「学校生活編」のカードを使い比較し、パラオや沖縄の現状と課題について理解を深めることを主題としている。それぞれのカードは使用する教科・科目等の目的に応じてどれかを使用することが出来る。

社会編:内容が高度だが、特にパラオと沖縄の類似課題を考え、その解決策を議論することを目的としている。これらの教材を使って学ぶ児童・生徒たちが、他国を見ることで自分の住んでいる場所を客観視することが出来、その良さを知るとともに抱える課題をどう解決すべきなのかを考えることができれば嬉しい。

歴史・伝統編:地上戦が行われた等の共通点を考える時に「戦争とは何か」について考える導入となる。

学校生活編:パラオの小学校、高校で感じた日本との共通点と相違点を中心にカードを作成した。これは主にパラオという国への親近感を持つことに繋がり、国際理解教育のスタートとなる教材である。



村吉多賀子
八重山高等学校

パラオへの旅

私が行ったパラオ共和国という国は、南太平洋にある小さな国で、日本の真南に位置しています。

気候は「海洋性の熱帯雨林気候」に属しています。

平均気温は 28°C と温暖で日本と比べたら過ごしやすい気温ですが、6 月から 8 月にはスコールが降り、また年間雨量は 3,025mm と、雨が多い地域です。

パラオの人たちは日本人と同じように恥ずかしがり屋に見えましたが、私たちが道を歩いているとたくさんの方々が「こんにちは!」と車から声をかけてくれました。

ホームビジット（一般家庭への訪問）では魚やマングローブカニや芋の料理をふるまってくれて、とてもおいしかったです。

小学校で授業をしましたが、子供たちは人懐っこく、パラオの色々なことを英語で教えてくれました。

パラオには日本から来たたくさんの JICA 海外協力隊の方々があり、国際協力が根付いている国でもありました。

10 日間の訪問でしたが、とても充実した旅でした。

〈参考〉

外務省. “パラオ共和国”. 2024-1-26. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/palau/index.html> .

在パラオ日本国大使館. “パラオ基本情報”. https://www.palau.emb-japan.go.jp/embassy/palau_info_j.htm .

<p>①</p> <p>骨折したら外国の病院まで行かなくならない。</p>	<p>②</p> <p>肥満率が85%で世界第二位 (2016年時点)</p>	<p>③</p> <p>外国から働きに来て いる人の多くがフィリ ピンやバングラデシュ 出身である。</p>
<p>④</p> <p>家族のつながりを大事にしていて、家族が亡くなったら葬式のためにおそろいのTシャツを作る。</p>	<p>⑤</p> <p>米国が継続的に財政支援を行っている。</p>	<p>⑥</p> <p>食料の大部分を米国本土からの輸入に依存している。</p>

<p>① 重い病気や怪我の 場合、離島では治療 が困難なので本島の 病院に移らなくてはな らない。</p>	<p>② 50代男性の肥満率 が50%で、2人に1 人が肥満である。 (2016年時点)</p>	<p>③ ネパールなどからの 外国人労働者の多く はホテルやコンビニ で働いている。</p>
<p>④ 家族のつながりを 大事にしていて、 お墓に親戚が集まり 食事をする行事があ る。</p>	<p>⑤ 歳入のうち、 自主財源は30%以 下である。 (2021年時点)</p>	<p>⑥ 食料自給率32% (2020年時点)</p>

「パラオ or 沖縄 どっちがどっち?ワークショップ」 -社会編-

()グループ
グループのメンバー:

1. 「パラオへの旅」を読んで、パラオの情報を書き出そう

2. カードゲームを通して、印象に残ったカードについて記録しよう

カードの番号と内容	迷った!/面白い!/意外だなあと思ったこと

3. 沖縄の課題を考えよう

(1) 沖縄カードの中で、あなたが思う沖縄の1番の課題とは何かを考えよう

* 沖縄の課題とは _____ (番号を記入) である。

(2) 沖縄の課題について、解決すべき課題の優先順位を班で考えよう

*④以外のカード番号を並べてみよう 班で決まった優先順位で番号を□内に記入しよう

□

➡

□

➡

□

➡

□

➡

□

〈優先度〉 高い

低い

(3) 優先順位を決める時に何を基準としましたか? ()

4. 【ふりかえり】このワークでの気づきをまとめましょう

年 組 番号 氏名: _____

パラオと沖縄・どっちがどっち?カード 解説〈社会編〉

- 「① パラオ:骨折したら外国の病院まで行かなくてはならない。」
パラオでは慢性的な医師不足が深刻な問題になっており、入院施設を有する総合病院も国内に一カ所あるのみで、科によっては専門医不在で医療レベルは十分とは言えない。
私が出会った少年は、骨折のため台湾の病院に2か月入院していたそうだ。
出典:外務省,“世界の医療事情 パラオ”,
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/medi/oceania/palau.html>
- 「① 沖縄:重い病気や怪我の場合、離島では治療が困難なので本島の病院に移らなくてはならない。」
沖縄の離島でも医師不足は課題で、重大な病気や怪我の場合、沖縄本島の病院での治療を余儀なくされる場合がある。
- 「② パラオ:肥満率が85%で世界第二位(2016時点)」
出典:Our World in Data,“Share of adults who are overweight or obese, 1975 to 2016”
<https://ourworldindata.org/grapher/share-of-adults-who-are-overweight?tab=table>
- 「② 沖縄:50代男性の肥満率が50%で、2人に1人が肥満である。(2016年)」
出典:沖縄県,“平成28年度沖縄県県民健康・栄養調査結果”,2018.4.2
<http://www.kenko-okinawa21.jp/090-docs/2018033000018/>
- 「③ パラオ:外国から働きに来ている人の多くがフィリピンやバングラデシュ出身である。」
パラオでは主に観光業でフィリピン人やバングラデシュ人が働いている。
出典:独立行政法人国際協力機構(JICA),および株式会社日本経済研究所,
パラオ国開発と投資促進に向けた経済・主要セクター情報収集・確認調査ファイナルレポート,
2020年10月,p.1,<https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/12360236.pdf>
- 「③ 沖縄:ネパールなどからの外国人労働者の多くはホテルやコンビニで働いている。」
沖縄での外国人労働者は国籍別にみるとネパール人が最も多く23.8%、ベトナム人が15.3%、インドネシアが14.6%となっている。(2023年10月末時点)
出典:厚生労働省沖縄労働局,“外国人雇用状況”の届出状況【沖縄労働局】,2023.10,p.1,
<https://jsite.mhlw.go.jp/okinawa-roudoukyoku/content/contents/001707752.pdf>
- 「④ パラオ:家族のつながりを大事にしている、家族が亡くなったら葬式のためにおそろいのTシャツを作る。」
パラオのお葬式では亡くなった方の名前などを書いたTシャツを作って着る慣習がある。
- 「④ 沖縄:家族のつながりを大事にしている、お墓に親戚が集まり食事をする行事がある。」
沖縄では清明祭(シーミー)や十六日祭(ジュウルクニチ)に、お墓で親戚が集まり食事をするなどして近況を報告しあう。
- 「⑤ パラオ:米国が継続的に財政支援を行っている。」
出典:外務省,“パラオ基礎データ”,2023.8.29,
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/palau/data.html>
- 「⑤ 沖縄:歳入のうち、自主財源は30%以下である。(2021年)」
出典:内閣府 沖縄総合事務局,“沖縄県経済の概況(令和5年10月)”,2023.10,p.73
https://www.ogb.go.jp/soumu/soumu_sinkou/003093
- 「⑥ パラオ:食料の大部分を米国本土からの輸入に依存している。」
出典:外務省,“パラオ基礎データ”,2023.8.29,
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/palau/data.html>
- 「⑥ 沖縄:食料自給率は32%(2020年)」
出典:農林水産省,令和3年度(概算値)、令和2年度(確定値)の都道府県別食料自給率,
https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/attach/pdf/zikyu_10-2.pdf
※表中、カロリーベース令和2年度確定値を引用

<p>① 信仰されている宗教 はキリスト教が多い。</p>	<p>② 公用語が日本語の州 がある。</p>	<p>③ 太平洋戦争で使われ た戦車や飛行機がそ のままの状態で野原 に置かれている。</p>
<p>④ アメリカ合衆国が 統治していた時代が ある。</p>	<p>⑤ 他国の技術支援を受 けて、リサイクルのガ ラス細工が作られて いる。</p>	<p>⑥ 高校の校庭に今でも 二宮金次郎の像があ る。</p>

<p>①</p> <p>多くの人は旧暦の盆を大切にしている。</p>	<p>②</p> <p>公用語はとくに定まっていない。</p>	<p>③</p> <p>太平洋戦争時に地上戦が行われ、住民の4人に1人が亡くなった。</p>
<p>④</p> <p>アメリカ世とよばれる時代があった。</p>	<p>⑤</p> <p>戦争後、廃瓶でガラスのコップなどが作られ、現在では観光資源となっている。</p>	<p>⑥</p> <p>戦前・戦中、方言を話すと罰せられた。</p>

「パラオ or 沖縄 どっちがどっち?ワークショップ」 -歴史・伝統編-

()グループ
グループのメンバー:

1. 「パラオへの旅」を読んで、パラオの情報を書き出そう

--

2. カードゲームを通して、印象に残ったカードについて記録しよう

カードの番号と内容	パラオと沖縄、同じだなあ、違うなあと思ったこと

3. 全体をふりかえって ※ 次のテーマから一つ選んで感想を書こう

パラオのひとたちへのメッセージ 戦争とは何か その他()について)

--

年 組 番号 氏名: _____

パラオと沖縄・どっちがどっち？カード 解説〈歴史・伝統編〉

- 「① パラオ：信仰されている宗教はキリスト教が多い。」
出典：外務省，“パラオ基礎データ”，2023.8.29，
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/palau/data.html>
- 「① 沖縄：多くの人は旧暦の盆を大切にしている。」
- 「② パラオ：公用語が日本語の州がある。」
日本統治時代の影響でパラオのアンガウル州では日本語が公用語となっていますが、日常的に日本語を話す人はいないようである。
- 「② 沖縄：公用語はとくに定まっていない。」
日本は法令において公用語を定めていない。
- 「③ パラオ：太平洋戦争で使われた戦車や飛行機がそのままの状態で見られる。」
パラオの各地（私たちが見たのはペリリュー島）では日米の戦車やゼロ戦などがそのままの状態で見られる。
- 「③ 沖縄：太平洋戦争時に地上戦が行われ、住民の4人に1人が亡くなった。」
1944年当時の沖縄県の総人口が590,480人。うち、122,228人の沖縄県出身者が沖縄戦により死亡した。（沖縄県援護課発表 1976年3月）
出典：沖縄県平和祈念資料館，“平和学習 沖縄戦Q&A”，
<http://peace-museum.okinawa.jp/heiwagakusyuu/kyozai/qa/index.html>
- 「④ パラオ：アメリカ合衆国が統治していた時代がある。」
パラオでは1947年に国連の太平洋信託統治領として米国の統治が始まり、1981年の自治政府が発足、1994年に独立した。
出典：外務省，“パラオ基礎データ”，2023.8.29，
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/palau/data.html>
- 「④ 沖縄：アメリカ世とよばれる時代があった。」
沖縄がアメリカ施政権下にあった、沖縄戦終結の1945年から日本復帰の72年までの間の27年間の時期を呼ぶ。
出典：琉球新報，“沖縄用語辞典 アメリカ世”，
<https://ryukyushimpo.jp/okinawa-dic/preentry-40133.html>
- 「⑤ パラオ：他国の技術支援を受けて、リサイクルのガラス細工が作られている。」
パラオ、コロール州リサイクルセンターには、JICA 草の根技術協力事業「パラオ国ベラウ・エコ・グラス・センター（廃ガラスを活用したガラス工房）の事業軌道化」による支援を受けてガラス工房「ベラウ・エコ・グラス・センター（Belau Eco Glass Center）」が併設され、廃瓶をリサイクルしたガラス細工の製作と販売がおこなわれている。
- 「⑤ 沖縄：戦争後、廃瓶でガラスのコップなどが作られ、現在では観光資源となっている。」
出典：沖縄県，“沖縄こどもランド 沖縄の伝統工芸”，
<https://www.pref.okinawa.lg.jp/kyoiku/kodomo/1002688/1002692.html>
- 「⑥ パラオ：高校の校庭に今でも二宮金次郎の像がある。」
パラオのガッパン州イボバン地域にあるモデクゲイ高校の校庭には二宮金次郎像がある。
- 「⑥ 沖縄：戦前・戦中、方言を話すと罰せられた。」
標準語励行のために沖縄各地の学校で方言札と呼ばれる罰札が用いられていた。方言を使うと次に使う人が現れるまで、〈方言札〉と書かれた板を首からぶら下げなくてはならない決まり。明治40年ごろから行われ、昭和期に入り盛んになった。
出典：琉球新報，“沖縄用語辞典 方言札”，
<https://ryukyushimpo.jp/okinawa-dic/preentry-42917.html>

<p>①</p> <p>学校の制服は スーパーマーケットで 買うことができる。</p>	<p>②</p> <p>高校生は自分で車を 運転して登校している 人もいる。</p>	<p>③</p> <p>教室の清掃は当番制 で生徒が行う。</p>
<p>④</p> <p>毎日、朝の会で ラジオ体操を行う 学校がある。</p>	<p>⑤</p> <p>給食を残す子どもた ちも多いが、その多く が豚の餌になる。</p>	<p>⑥</p> <p>離島の生徒は オンラインで授業を受 けることができる。</p>

<p>① 学校の制服は専門店で購入するが、最近ではリユースを行う学校もある。</p>	<p>② 子どもたちだけで歩いて登校する場合が多い。</p>	<p>③ 給食の後や帰る前にみんなで清掃する。</p>
<p>④ 夏休みにラジオ体操が各地域で行われる。</p>	<p>⑤ 給食を残すことは良いこととされていない。</p>	<p>⑥ 学校に登校して授業を受けることが原則。</p>

「パラオ or 沖縄 どっちがどっち?ワークショップ」 -学校生活編-

()グループ

グループのメンバー:

1. 「パラオへの旅」を読んで、パラオの情報を書き出そう

--

2. カードゲームを通して、印象に残ったカードについて記録しよう

カードの番号と内容	「面白い!」と思ったこと/変だなあと思ったこと

3. 全体をふりかえって ※ 次のテーマから一つ選んで感想を書こう

- パラオのこどもたちへのメッセージ パラオについて分かったこと 自分自身について
 沖縄についての新(再)発見 その他()

--

年 組 番号 氏名: _____

パラオと沖縄・どっちがどっち?カード 解説〈学校生活編〉

「① パラオ:学校の制服はスーパーマーケットで買うことができる。」

パラオの学校制服(小学校、高校)はどこかの学校のものもスーパーマーケットで購入することができる。

「① 沖縄:学校の制服は専門店で購入するが、最近ではリユースを行う学校もある。」

沖縄の八重山高校では「制服リレー」という制服を卒業生から提供してもらった制服を必要な人にリユースする仕組みが行われている。

「② パラオ:高校生は自分で車を運転して登校している人もいる。」

パラオの高校で出会った生徒は車に乗って登下校をしていた。

「② 沖縄:子どもたちだけで歩いて登校する人が多い。」

「③ パラオ:教室の清掃は当番制で生徒が行う。」

パラオの小学校では授業が終わると生徒たちは椅子を机の上にあげ、清掃当番の生徒が掃除をしていた。

「③ 沖縄:給食の後や帰る前にみんなで清掃する。」

「④ パラオ:毎日、朝の会でラジオ体操を行う学校がある。」

パラオのガッパン州イボバン地域にあるイボバン小学校では朝の会で日本のラジオ体操を行うそうである。

「④ 沖縄:夏休みにラジオ体操が各地域で行われる。」

「⑤ パラオ:給食を残す子どもたちも多いが、その多くが豚の餌になる。」

パラオの子供たちの残食も日本と同じように多い。しかしパラオではそれがブタの餌になっていた。

「⑤ 沖縄:給食を残すことは良いこととされていない。」

「⑥ パラオ:離島の生徒はオンラインで授業を受けることができる。」

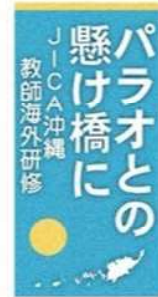
パラオ高校では離島であるペリリュー島に住んでいる生徒がオンラインで授業を受けていた。

「⑥ 沖縄:学校に登校して授業を受けることが原則。」

沖縄タイムス社「パラオとの懸け橋に」

沖縄タイムス 2023年9月3日（日）教育20面

遠い国で息づく「日本」



1

台風6号の影響で1週間遅れのスタートとなった教師海外研修。街中を走る日本車、時折聞こえる片言の日本語。トランジットも含めると移動に約10時間かかる遠い国パラオは、「日本」が今も息づいている国である。



伊集環 (39) 豊見城小教諭



聞いて共通していると感じたことは逆境を楽しむ姿勢、パラオの発展に貢献したいという熱い気持ちであった。年齢に関係なく、どの方もとても輝いたまなざしをしており、

今も山中に残る撃墜されたゼロ戦の残骸
=8月14日、パラオ・アルモノグイ州

同じ日本人として誇らしい気持ちになった。
また、パラオ滞在中は太平洋戦争時の史跡を多く見ることができた。われわれの祖先がこんな遠い地で国のため、愛する人のためにどんな気持ちで命を落としていったのかと思うと、とても胸が苦しくなった。戦後78年たった今もそのまま残された日本軍の戦車やゼロ戦をじかに見て触れたことで、戦争が単なる遠い昔の出来事ではなく、今もつながっているとはつきり感じ取ることができた。

さらに貴重な経験として、パラオ国内の小学校で授業を担当させてもらうことができた。英語が苦手な私にとつては大きな挑戦であり、不安でいっぱいだった。しかし、学校を訪れると、パラオの子どもたちの人懐っこさ、笑顔に迎えられる、また、青年海外協力隊の方のサポートもあり、楽しく授業を終えることができた。帰る頃には、もつとここで授業をしてみたいと思っただけである。

私たちは今回の研修で学んだことを教材化し、子どもたちに還元しなければならぬ。教材作成の視点としては、パラオの文化、抱える課題、沖縄とのつながり、平和教育、世界で活躍する日本人など切り口は多くある。私のパラオでの学びを通して視野を広く持ち、世界に目を向ける子が一人でも多く出てくれば幸いである。

昔から結びつきの強い沖縄とパラオの関係が、より素晴らしいものになればと願っている。その懸け橋に少しでも協力できればと思う。

◇ ◇

県内小中高の教師6人が8月8日から18日まで、パラオを訪れて国際協力への理解を深めた。交流を通し、学んだことや感じたことを報告する。(毎週日曜日掲載)

沖縄タイムス社提供

教職への情熱を再確認



2

パラオのガツパン州にあるイボバン小学校という小さな学校を訪れると、「Sensei sensei!」と子どもたちが明るい声で話しかけ、私の周りに集まって来た。彼らの屈託のない笑顔を見てみると、「この子たちにすてきな未来が待っているといいな」と思った。

私は、パラオという西太平



浦崎政成(32) 黒島中英語科教諭



洋のミクロネシア地域にある小さな島国を訪れた。太平洋戦争の前後に日本やアメリカに統治されていた時代もあり、さまざまな文化が混在し児童に沖縄を説明する浦崎教諭(右) 8月14日、パラオ・ガツパン州

ている国である。親日国であり、街を歩いていると「コンニチハ」と声をかけてくれる人もいた。

研修でパラオの漁獲技術向上のために活動しているJICAの取り組みを見たり、生活習慣病の改善などに取り組んでいる日本の団体を訪れる中で、多くの日本人が外国のために一生懸命働いていることに誇らしい気持ちになった。

その中で私が一番印象に残ったのが、イボバン小である。青年海外協力隊として日本人の先生が派遣されており、算数や体育の授業をサポートしていた。1日だけではあったが、私は隊員の活動や授業風景などを見ることができた。

休憩時間に女子中学生に「将来の夢は何?」と尋ねると、「イラストレーターになりたい」と言いながら自分で描いたアニメのイラストを見せてくれた。その瞬間、「やっぱり私は子どもたちと関わる仕事が好きだ」と自分の気持ちを再確認するともに、「可能性に満ちあふれた子どもたちのために自分ができることは何だろう」という疑問が生まれた。何度も考えているうちに、「今、目の前にいる生徒たちに真摯に向き合うこと、世界の現状を沖縄の子どもたちにも知ってもらうこと」という答えが見つかった。

専門とする英語の授業だけではなく、さまざまな教育活動で国際協力やSDGsを目指す取り組みをしたい。10月には私が勤める黒島中学校とイボバン小でオンライン合同授業を行う予定だ。1人でも多くの児童生徒に、海外の子どもたちと交流してもらいたい。

(毎週日曜日掲載)

沖縄タイムス社提供

祖父の足跡を追体験



3

祖父がこの島にいたという。

本年度の教師海外研修が3年ぶりに行われることが分かり、長年の希望だったことから応募を決めた。パラオについては大戦中の激戦地であったことや、数年前から沖縄の企業や漁協がパラオへ技術支援を行っているということは



村吉多賀子(38) 八重山高地歴・公民科教諭



本や新聞報道などで知っていた。だが、恥ずかしながらそれ以上のことは知らなかった。パラオには日本統治時代の遺物が今でも残っている。例えばパラオ高校にはその時の門柱が残り、最高裁判所の建物は、当時の南洋庁パラオ支

日本のデイサービスに当たる施設で、日本にルーツがある人と話す村吉多賀子教諭(前列左)＝8月11日、パラオ・コロール州

庁の建物を修復して使われている。現地の方の名前に「イシカワサン」「シゲオ」など日本風の名が付けられていることなど、パラオには今でも日本統治時代の影響が残る。

研修中、ガイドの方から現地でたまたま沖縄パラオ会の名簿を見せていただいた。なんとそこに、16年前に他界した祖父の名前があったのだ。祖父は戦前、パラオにいたようだ。北部にあるバベルダオブ島、ガラスマオという地域で幼少時代を過ごしていた。

そのことについて何も知らずにパラオへ来た私は、驚いたのと同時にうれしかった。祖父がどのような戦前や戦中を過ごしたのか、ずっと知りたかった。しかし亡くなった今は、それを知るすべがなかった。

祖父がいたことを知った後のパラオでの滞在は、祖父の足跡をたどる時間となった。もしかするとパラオに来たのは必然だったのかも知れない。祖父が現地でのどのような生活を送っていたのかはよく分からないが、祖父は確かにこの島にいた。ここで生活していた。それと同じく、多くの日本人・沖縄人の「暮らし」もここにはあった。それがパラオで今も息づいている。

本研修に参加でき、自分の中でさまざまな「問い」が生まれた。戦前にパラオへ渡った日本人の生活はどうだったのか、日本とパラオのこれらの関係はどのようなかたちで望ましいのか、加えて自分のルーツに関する問いなど。教育の現場で生徒と一緒にこれらを探求するのが今から楽しみだ。ワクワクが止まらない。(毎週日曜日掲載)

沖縄タイムス社提供

過去と繋がる瞬間体感



4

孔子が「論語」為政編で、一生を回顧して人間形成の過程を述べた一節に「四十而不惑」という言葉がある。40歳になると心に迷うことがなくなつたという意味だが、私は40歳を過ぎてても、まだ迷つてばかりである。



大城真紀子(43) 豊見城中国語科教諭



ここ数年、平和教育の在り方を模索してる私は7月、うなあ沖縄が企画する「平和教育指導者養成講座フィールド編」に参加し、読谷村の戦跡を巡りながら沖縄戦や平和教育について考えていた。約1カ月後の8月、私はパラオのペリリュー島に立つていた。北波止場から南に数百

旧日本軍総司令部跡を訪ねて説明を聞く大城真紀子教諭(右から3人目)＝8月12日、パラオ・ペリリュー島

は進んだ先にある千人洞窟に入ったとき、読谷のシムクガマを思い出した。千人洞窟は一般住民が避難していたシムクガマと違い、野戦病院の跡だった。日本兵が潜伏していた形跡がそのまま残っており、そこだけ時間が止まっていた。

さらに先を進むと、日本海軍司令部が廃虚となつてジャングルにたたずんでいた。中に入ると、艦砲射撃によつてできた大きな穴があった。2階建ての鉄筋コンクリートを突き抜けた穴は、砲弾の大きさと衝撃をそのまま伝えていた。

読谷村の戦跡を巡りながら「平和教育は戦争の悲惨さを伝えるだけでなく、その構造を考え、どうしたら戦争が起らない社会にできるか、

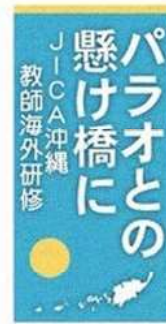
どうしたら永続的な平和が訪れるのか、生徒と考えていくことが大切なのではないか」と思った。

そんな考えを巡らせていたら、米海軍上陸の碑が目に残った。ガイドの平野雅人さんから話を聞いて、ハッとした。ペリリュー島に上陸した米海軍が、マッカーサー率いる陸軍と入れ替えに向かった先が、1カ月前に巡つた読谷の海に繋がっていたのである。思わず身震いした。全ての出来事が線で繋がる瞬間だった。

過去は今に繋がり、今が未来に繋がること、自分と世界が繋がっていることを子どもたちに伝えたい、伝えなければならぬ、と使命感にも似た感情がこみ上げてきた。

(毎週日曜日掲載)

戦跡紹介 伝え方学んだ



5

「Hello!」
「Enjoy your stay in Palau.」

通りを歩いていると、気さくに話しかけてくる。こちらから話しかけると、知っている日本語を使って答えてくれる。世界一の親日国と言われる



池宮牧子(44) 名護市東江小英語専科



るパラオ共和国。今夏、私は、教師海外研修で、パラオ共和国を訪れた。
日本からおよそ3千キロ南。ミクロネシア連邦の最西端に位置するこの国は、地理的・気候的に沖縄によく似ている。ローカルマーケットには、

旧日本海軍が掘削した人工洞窟「千人洞窟」の前で説明する平野雅人さん＝8月12日、パラオ・ペリリュー島北部

バナナやドラゴンフルーツなどの果物、ゴーヤーやオクラなどの野菜が並んでいる。道路沿いにはヤシの木やハイビスカスが植えられ、河口にはマングロープが自生している。主な産業は観光業で、コラルブルーに輝く美しい海と色とりどりの熱帯魚を楽しむに、毎年多くの観光客が訪れる。

戦跡ガイドをしている平野雅人さんに出会った。私は、彼の伝え方にとっても感銘を受けた。膨大な知識量から伝えるべきことを選び、主観を挟まず、この地で起きた出来事を的確に伝えていた。

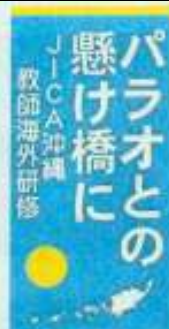
自然豊かで美しいこの島は、赤い血で染まった歴史がある。太平洋戦争中、日本に統治されていたパラオは、フィリピンの奪還を図るアメリカの標的となり、ペリリュー島とアンガウル島で2カ月以上の地上戦が続いた。住民は疎開させられ、戦争に巻き込まれることはなかったものの、日米合わせ2万人もの兵士が尊い命を失った。

ガイドする上で気を付けていることを尋ねると、「自分の思いや解釈ではなく、あった事実を伝えることに努めている。自分から『平和のありがたさ』を言葉にして伝えるのではなく、実際に目で見て話を聞いて平和の尊さを感じてもらえるようにしている」と語った。物事を正確に、かつ、多角的に見ることの大切さを改めて体感した。

パラオで得た気付きを子どもたちと共有し、より良い平和学習を作っていきたいと思った。

沖縄タイムス社提供

現地授業で沖縄を紹介



6

私が4学年担任をしていた頃、当時の学年主任から国際理解の授業を教わり、実践したことをきっかけに海外研修に興味を湧いた。そんな中、パラオ共和国で教師の海外研修が実施されることを知り、応募した。パラオへ到着し、「ここは本当に海外なのか」と何度も思った。道路を走る車は日本製が多く、マーケットでは沖縄のフリーマー



榎原美緒(32) うるま市宮森小教諭



ケットを思い出すような光景、さらに福祉施設へ行くとか花札で娯楽を楽しむパラオ人の光景があったからだ。

漁獲技術や環境保全、ベ
ムーンズ小学校で子どもたちにカチャーシーを教えている榎原美緒教諭(左)＝8月14日、パラオ・コロール州の同校

リリニュー島での戦跡観察など多くの研修を重ねるたびに、日本と密接な関わりがあり、そして歴史的なつながりが強いことを学んだ。最も心に残ったことは、さまざまな分野で技術協力をしている日本人や、日本の技術を取り込みつつパラオの発展に尽力するパラオ人だ。その情熱はどこから湧きあがってくるのだろうかかと驚きの連続であった。

研修中、青年海外協力隊員と似た気持ちを体験できた。パラオの小学校でのシヨブシャドウィング。英語が得意でない私にとって、人生で最も緊張した。3年生の教室へ入ると算数の学習をしていた。訪問した学校では、パラオ語・英語・算数・社会・体育の5教科を指導し、音楽の授業が教育課程に含まれていないということが分かった。そんな子どもたちへ、

日本の小学校で行う音楽の授業風景を動画で見せながら説明し、沖縄の伝統芸能を紹介した。

授業を終えると「日本の教材を使った授業に子どもたちはどんな反応を示すのか」「他教科の授業もやってみたい」と思う自分がい。また今回の経験を日本の子どもたちへどう伝え、どのように授業を作るか想像すると、体験したことのない感情がこみあげた。

パラオ研修は、私にとって大きな一歩だった。私の経験を教材化することで子どもたちは、世界をより身近に感じ、日常生活では予想できない考えや疑問が浮かぶだろう。さまざまな分野に目を向けてもらうために、多くのきっかけを与え続けられる教師でありたい。私もさらに多くの学びを得るため、視野を広げ挑戦し続けたい。

(おわり)

沖縄タイムス社提供

琉球放送 News Link 「パラオ通信」

今年度、地方マスメディア派遣プログラムで琉球放送株式会社（RBC）の記者も同行しました。パラオで実施されている国際協力事業や現地の様子が、全5回シリーズで夕方ニュースに特集されました。下記リンク先から視聴できます。



パラオってどんな国？

子どもの名前が『オカダにオカムラ』
パラオ共和国ってどんな国？県系人が多く住む親日国に行ってみた
<https://youtu.be/uupSRU-62Ds?si=B5NTT2dWTRMLV1so>



パラオで学ぶ八重山高校教師

「肌で感じたことが大きな経験」
パラオに派遣された教師たち 現地で得た教科書にはない学び
<https://youtu.be/mzoE1BbUgOE?si=Rou18R-TEBKWoPCi>



パラオ漁協組合の挑戦

パラオの漁業は沖縄発!? 『漁協にバヤオ』
沖縄の漁業に魅せられたパラオの漁師たち
<https://youtu.be/IHz5LJ25Qgs?si=HZOa8QxWdLtWISqZ>



統治時代のパラオを生きた日本人たち

「戦争終わってみんな帰った。私だけ残して」
戦に翻弄されパラオ人として生きる日本人女性 抱き続ける日本への思い
<https://youtu.be/LsWltafxP6Y?si=6z1dzkDYyEzXVzL2>



祖母の足跡を辿る ～コロール4丁目～

「自分で口には出さない」
戦争が蓋をした祖母のパラオで生きた記憶パラオを訪れた孫が辿る祖母の足跡
<https://youtu.be/93bnIA-9TTc?si=LWtsLG8gZjOtkBv->




教材作成アドバイザー
沖縄NGOセンター 奥山有希氏

スタッフ
JICA沖縄
市民参加協力課
木田克人
大城工

JICAパラオ
小林龍太郎
井上栄

JOCA沖縄
垣花拓実
池田紘子



2023年度（令和5年度）
JICA教師海外研修
報告書・ワークショップ集

【発行】

2024年3月

【発行者】

独立行政法人国際協力機構 沖縄センター（JICA沖縄）

〒901-2552 沖縄県浦添市前田1143-1

TEL：098-876-6000/FAX：098-876-6014

【研修実施団体】

公益社団法人 青年海外協力協会沖縄事務所（JOCA沖縄）

〒901-2132 沖縄県浦添市伊祖1丁目1番21号

OFFICE TIMEビル502号室

TEL：098-943-7801/FAX：098-943-7802



